

サバルタン・マイノリティ集団・政治的連帯* ——仏・旧植民地出身移民女性を中心とする 対抗的公共圏の戦術——

Subaltern, Minority Groups and Political Solidarity: Tactics within Counterpublics Centering Postcolonial Migrant Women in France

田邊 佳美
TANABE Yoshimi

東京外国語大学世界言語社会教育センター
Tokyo University of Foreign Studies, World Language and Society Education Center

著者抄録

本稿は、言説実践に参加する可能性を阻まれたサバルタンが、多元的なアクター間での政治的連帯を樹立し、共に参加しうる対抗的公共圏を構築するための戦術を問う。フランス・パリ郊外の自治体で、旧植民地出身移民女性らが中心となり織り成す運動空間の事例からは、旧植民地出身移民とその子孫を中心としたマイノリティ集団のなかでも、とりわけ周辺化された非識字で高齢の女性たちが、運動空間の「隠された表現」を通して密かに共有される対抗的秩序とそれに基づく相互作用を通して主体となり語り出す様相が浮かび上がった。社会的にも学問的にも周辺化されてきた郊外の移民女性らの運動を、フランスの旧植民地出身移民とその子孫の社会運動や集合行為をめぐる研究の系譜に位置付け直し、社会運動の予示的政治に着目することで、本稿は近年のフランスにおける旧植民地出身移民の「新たな世代の運動」論に新しい視点をもたらす試みでもある。

Summary

This paper explores tactics for building political solidarity between different social groups, and thereby making subaltern counterpublics accessible to the most discursively marginalized. Based on ethnographic research on activist spaces centering postcolonial migrant women in French working-class banlieues, the paper examines how illiterate older women, who are particularly marginalized among postcolonial migrant (descendant) groups, become political subjects and transform silence into language and action. This transformation is made possible through interactions based on the counter-order shared by “hidden transcripts” within activist spaces. This article aims to bring new perspectives to the recent studies of the “new generation” of French postcolonial migrant movements, by repositioning illiterate and elderly women’s movements, which have been socially and epistemologically marginalized, within the literatures of French postcolonial migrant (descendant) movements, and by focusing theoretically on the dimension of prefigurative politics of the “now and here”.

キーワード

政治的連帯 マイノリティ フランス 旧植民地出身移民女性 サバルタンの対抗的公共圏

Keywords

political solidarity; minority; France; post-colonial migrant women; subaltern counterpublics

原稿受理日：2023.1.6.

Quadrante, No.25 (2023), pp.55–85.

目次

- | | |
|--|----------------------|
| 1. 問題の所在と論文の射程 | 2-1. 研究対象と研究視角 |
| 1-1. 多元的なマイノリティの運動空間における
政治的連帯を考える | 2-2. フィールドとデータの概要 |
| 1-2. 仏・旧植民地出身移民とその子孫の運動
の系譜における新たな世代の運動 | 3. 政治的連帯の質的分析 |
| | 3-1. 〈公的言説〉と〈隠された言説〉 |
| | 3-2. 同等で物理的な参加 |
| 2. 研究方法と調査のフィールド | 3-3. 支配的な知の秩序への不服従 |

* 本稿の執筆にあたっては、2022年6月18日の第70回関東社会学会報告で頂いた質問およびコメント、本誌査読者のコメントから多くの示唆を得た。この場を借りて感謝の意を表したい。



3-4. 権力の共有と資源の再分配

4. おわりに

1. 問題の所在と論文の射程

1-1. 多元的なマイノリティの運動空間における
政治的連帯を考える

本稿は、言説実践に参加する可能性を阻害されたサバルタンを含む多元的なアクターが参加可能な対抗的公共圏を構築するための政治的連帯の戦術を、フランス・パリの都市部郊外に生きる旧植民地出身移民女性らが織り成す運動空間の事例から明らかにする。

集合行為や社会運動の研究者は、1960～1970年代以降の公民権運動やフェミニズム運動などに、マイノリティが担い手となる「新しい社会運動」(Touraine 1978)を見出した。それまで集合行為や社会運動が「階級」を軸に労働者が生み出すと考えられてきたところに、「人種」や「ジェンダー」など社会的な属性や経験を共有するマイノリティが運動の主体として発見された。しかし、新しい社会運動に注目が集まった当時すでに指摘されていたように、マイノリティは決して均質な集団を成さない。運動内部におけるアクターの非均質性と参加者同士の権力関係は、一部の担い手によって早くから指摘されてきた。その萌芽は、例えば1960年代後半に、伝統的な左派政党・組織の特徴である権威主義に対抗して、新たな集合行為のあり方を模索した学生運動や労働運動に見出すことができる(Breines 1982; 小杉 2018)。

同じ文脈で言及されることはより少ないが(Lin et al. 2016)、1960～1970年代に公民権運動やフェミニズム運動に参加した黒人フェミニストの思想家たちも(Combahee River Collective 1979; Wallace 1982; bell hooks 1984; Lorde 1986; Hill Collins 1989)、社会

変革を志す運動内部の権力関係を問題化してきた。黒人フェミニストは、当時のフェミニズム運動や公民権運動が、いずれの運動内でも脆弱な立場に置かれた黒人女性を不可視化・周辺化することで統一的な集合的アイデンティティを成り立たせようとしたことを批判する。ベルフックス(bell hooks)は、フェミニズム運動を主導するブルジョワ白人女性が、黒人女性の直面する人種差別を無視しながら無条件に連帯を求める政治実践のあり方を批判し、内部に矛盾を含む「女性」というマイノリティ間の「政治的連帯(political solidarity)」¹(bell hooks 1984: 43)を実質的に実現することで、フェミニズム運動を刷新する必要性を主張した。

この問題提起からは、マイノリティの運動空間が多元的な立場から構成されたものであるという前提に立った上で、どのように、政治空間で言説実践に参加する可能性を最も閉ざされた「サバルタン(subaltern)」(Spivak 1988)に開かれたものとして構想し、脱自然化された連帯を成立させ得るかという問いが浮上する。

これらの問いは、近年、反グローバリゼーションや反資本主義の運動を起点に注目を集めつつある、社会運動の「予示的政治(prefigurative politics)」(Holloway 2002=2008; Graeber 2004=2006)に関わる問題と言える。ネオリベリズム、人種差別、性差別等として表出する支配関係は多くの社会で制度化され、人々の日常生活のあらゆる側面に不可視の権力として介在している。すでに見たように、社会変革を目指すマイノリティの運動空間も例外ではない。その運動空間を、マクロな社会変革を目指す「戦略的政治(strategic politics)」(Breines 1982: 7)の単なる手段と見做さずに、そこで日常的に介在する支配関係と権力に立ち向かい、運動空間のミクロな政治的实践から予示的

¹ 2017年の日本語版では、“political solidarity”は「社会運動としての連帯」(bell hooks 1984=2017: 70)と訳されている。しかし、“political”という原語の意味を反映させるため、本稿では「政治的」の訳を当てた。

に新たな社会関係を構想するのが予示的政治である。この志向に即せば、日常の政治的実践において運動が目指す社会関係を予示的に実現すること自体がひとつの目標となる(小杉 2018)²。だからこそ、予示的政治を志向する運動は、マイノリティ集団で一層周辺化されたサバルタンの運動参加の不／可能性を浮かび上がらせる。

マイノリティの政治参加への契機という社会運動の予示的政治に近いところで、政治哲学の観点から N. フレイザー (Nancy Fraser) が提唱したのが「サバルタンの対抗的公共圏 (subaltern counterpublics)」(Fraser 1992: 67) の概念である。フレイザーは、J. ハーバーマス (Jürgen Habermas) が構想した非国家的で民主的政治空間としての「公共圏 (public sphere)」(Habermas [1961] 1990=1994) 概念を批判的に再検討し、権力関係の下位に置かれ支配的な公共圏にアクセスできない個人や集団が作り出す政治空間を「サバルタンの対抗的公共圏」と呼んだ。ここで想定されている「サバルタン」すなわち「従属的な社会集団の構成員」とは、「女性、労働者、有色人種、ゲイおよびレズビアン」である (Fraser 1992: 67=1999: 138)。フレイザーは、これらの集団の構成員が、対抗的公共圏において、支配的な価値観に対抗する自分自身の肯定的なアイデンティティや利害関心、社会への要求を、新たな言葉を発明しながら提起し、支配的言説に対抗する言葉・定義・言説を作り共有することができると論じる (ibid.)。

他方でフレイザーは、サバルタンの対抗的公共圏の内部に排除と周辺化を想定しながら

らも、それを周辺的な問題として片付けている (Fraser 1992)。その意味で、フレイザーの対抗的公共圏は、いかなる空間においても声を発する可能性を閉ざされたサバルタンよりも、広義の従属集団ないしマイノリティ集団に焦点をあてた議論だと言った方が良いだろう³。ベルフックスが提起したような絡み合う権力関係の構造、すなわちインターセクショナルリティ／交差性を考慮すれば、権力や資源に欠いたものがその他の参加者と居合わせる多元的な討議空間で、自らの声を反映させた対抗的言説を他者と共に作ることは容易ではない。さらにフレイザーは、従属／マイノリティ集団の対抗的公共圏がア priori に存在すると想定するが、その点にもすでに疑問が呈されてきた。徐阿貴 (2005, 2012) は、高齢の在日朝鮮人女性らが夜間中学という場で社会運動を組織するに至るプロセスの質的分析を通して、在日朝鮮人女性と彼女らをとりまくアクターが、「交流」や「支援」の形の「多元的な相互作用」(徐 2005: 124) を通して、開かれた対抗的公共圏を創り出す様相を明らかにした。しかし、対話や論争に参加する物理的手段や財政的資源を欠いたもの、集合するための空間を持たず孤立したもの、討議空間への参入障壁を抱えたものは、他者との権力関係に規定されるなかで、どのように政治的連帯を作り上げ、参加可能な対抗的公共圏を有し得るのだろうか。サバルタンが参入可能な、というよりむしろサバルタンを中心化し、政治的連帯を内包した対抗的公共圏を、戦略的な社会変革を目指すのと同時に——もしくはその前提条件として——、社会運動の予示的なレベルで作り上げるため

² 予示的政治を志向する運動が、必ずしもマクロな社会変革を志向する戦略的政治の側面を捨て去るわけではない。小杉亮子 (2018) が強調するように、戦略的政治と予示的政治の運動原理は対立関係にあるだけでなく、相補関係にもあるため、ある社会運動において「同一の組織や同一の参加者がふたつの運動原理を持ち合わせ、両者を使い分けたり、両者のあいだで葛藤が起き」(小杉 2018: 23) ることは十分想定されている。

³ フレイザーは、「サバルタン (subaltern)」という用語をスピヴァク (Spivak 1988) に負っていると説明しているが (Fraser 1992)、彼女の「サバルタン」の使用法は、スピヴァクが単なるマイノリティとは区別した形で発話の可能性を一切閉ざされたものとして位置付けたサバルタンとは異なる。

の具体的な「戦術(tactiques)」(De Certeau 1998=2021)や条件は何だろうか。

これらの問いに答えるために、本稿ではフランス・パリ郊外の自治体で2002年前後から旧植民地出身移民女性らが作り上げた運動空間を考察する。「旧植民地出身移民女性ら」と表記するのは、対象となる運動空間の主体が必ずしも旧植民地出身移民女性に限られないからだ。必ずしも誰の運動、誰の空間と簡単に定義できない点こそがこの運動の特徴である。扱われる主題は極めて幅広く、レイシズム、教育・雇用・住居差別、性差別、警察による暴力、貧困、民主主義、移民政策や移民史など多岐にわたる。その中心にはしばしば旧植民地出身の高齢で非識字の移民女性がいる一方で、「旧植民地出身」でも、「移民」でも、その「子孫」でも、「女性」でない人々も、時には「男性」も参加し、内部に差異や緊張を孕みながらも15年以上に渡り活発な活動を継続してきた。本稿では、この多元的で開かれた運動空間に着目することで、サバルタンが／との政治的連帯を成立させ、集合的に対抗的公共圏を作り出す戦術・条件の一端を提起したい。まず本節では、旧植民地出身移民を取り巻く社会・学術的文脈を概略し、事例とする旧植民地出身移民女性らの運動の歴史的かつ社会学的な位置付けを確認する。それらを踏まえた上で、第2節では研究方法・視覚と調査のフィールドを提示し、第3節ではエスノグラフィに依拠した具体的な事例の分析から、サバルタンに開かれた対抗的公共圏を維持する目的で、とりわけ密かに共有される運動空間の対抗的秩序とその基盤となる言語・概念を明らかにしたい。

1-2. 仏・旧植民地出身移民とその子孫の運動の系譜における新たな世代の運動

フランスの旧植民地出身移民とその子孫を主体とする運動史は、外国人／マイノリティや、

その中でも最も脆弱な立場に置かれた者が政治空間に参加することの可能性と困難を語る。労働者としての社会的権利、シティズンシップの獲得、失業・貧困の保障と対策、住宅への権利、人種主義的な教育・雇用制度の変革、逸脱した警察暴力の是正、ジェンダー化されたレイシズムによる制度的差別の法制度的改革など、旧植民地出身移民とその子孫の運動は常に制度変革と政治・経済・社会的権利を求めて集合的にフランス社会に働きかけてきた。以下では、旧植民地出身移民をとりまくフランスの政治・社会的文脈を概略しつつ、主に3つの時代の運動群を考察し、フランスのマイノリティが対抗的な運動空間を形成し、支配的な政治空間に参加し働きかけることの困難と可能性を考察する。

フランスは、戦後の高度成長期に、国策としてアルジェリアなど北アフリカの(旧)植民地から多くの移民労働者を受け入れた。戦前すでに還流型移民の「出稼ぎ」文化のなかにあった農村出身の単身移民労働者は、1960年代には出身地の農村秩序から離脱しフランスで都市労働者としてのアイデンティティ・生活様式を確立しつつあった(Sayad 1977)。「石油危機」の影響でフランスは1974年に新規移民の受け入れ停止を決定するが、これは逆説的に移民が家族を呼び寄せ本格的に定住することを促した。伊藤るり(1988)によれば、1960年代後半から徐々に社会的権利を手に入れた移民労働者は、不況下での定住で自らの職業的展望への危機感と剥奪感を増大させ、固有の労働運動を展開する。1960年代にはまだ生産現場の権力関係に端を発した、単独的・周辺的で単発の移民労働者の集合行為は、1970年代半ばには労働者寮などの居住空間における組織化された文化＝宗教的権利の主張や生活管理における人種差別の撤廃へとその争点を拡大させ、既存の労働組合と部分的

に連携しながらそれらの権利を勝ち取った(伊藤 1988)。他方で、この時代の旧植民地出身移民の運動は、フランスの主流の政治社会空間への対等な参入を求めるものではなかったことに特徴がある。すなわち、外国人／移民労働者にとっては、「労働こそが彼らの存在を正当化する営み」(ibid.: 52)であり、構造的な政治・経済的不平等の解消は運動の射程に入っていない。しかし、後述する子ども世代はその限りではない。フランス生まれ／育ちの旧植民地出身移民の子どもは、労働の場に限定されない形で、マジョリティのフランス人と対等な政治社会空間への参加を求めていく。

フランス政府は、1974年の新規移民受け入れ停止後、一時的な労働力と見做していた移民の自発的帰還を奨励する政策と、かれらの生活・労働を最低限保障する社会主義的政策の間で、自由主義から介入主義へと移民政策の舵を切る(伊藤 1988)。こうして1970年代後半から国や自治体の政策のもと、多くの旧植民地出身移民と家族が、労働者階級のフランス人や欧州出身移民が歴史的に居住する都市部「郊外(banlieues)⁴」(および都市中心部でも労働者階級が集まる団地の多い地区)へ移り住む(森 2016)。しかし、脱産業化による構造変化や排他的な教育・社会制度のもと、旧植民地出身移民の家族は、失業と貧困、学業失敗と雇用差別などの問題に直面していく。さらにこの時期、郊外の移民家族に生まれ／育ち教育制度や労働市場から締め出された10代や20代の若者の「非行」や「暴力」が、徐々に郊外自治体やメディアの注目を集め始める。極右政党の台頭にも後押しされ、1980年代を通して「移民出自の若者(jeunes issus de l'immigration)」

「移民の若者(jeunes immigrés)」、「郊外の若者(jeunes de banlieues)」は社会問題として国家政策の対象に位置付けられていく(Hajjat 2013)⁵。

こうした政治・社会的文脈のもと、1980～1990年代に登場するのが、1983年の「平等と反レイシズムの行進」を起点とした反レイシズムの運動群である。1983年10月、リヨン郊外での警察の発砲により重症を負った運動家T. ジャイジャ(Toumi Djaidja)を中心とした若者のグループが、警察の暴力を含むフランス社会のレイシズムを告発する目的でフランス各地での行進と集会を計画した。運動は徐々にメディアの注目を集め、6週間後には終着地点パリで10万人を動員し、大統領が代表団を出迎える社会現象となった。しかし行進は、表面的な「成功」を収めながらも、後に多くの当事者によって『挫折した運動』(Bouamama 1994)と評価される。確かに行進は、各地で孤立していた「移民の若者」にレイシズムという経験の共同体を可視化し、「行進の運動家世代」(Hajjat 2015)を生み出す「原点としての運動」(Hadj Belgacem & Nasri 2018: 30)になった。しかし当時は、当事者と非当事者、そして当事者同士が「服従ではない連帯関係」(Sayad 1999: 187)を作り上げる基盤が存在せず、当事者が思考と行為の両面で「独立性(autonomie)」を確保しつつ、主流の政治空間に参加し働きかける余地はなかった(Hajjat 2015)。行進が大規模な動員を達成したのは、圧倒的な資本と権力を備えた非当事者の神父やキリスト教団体シマッド(Cimade)、左派のジャーナリスト、社会党政権の一部に依るところが大きかった(ibid.)。

⁴ フランスに特有の郊外化の歴史から、階級的・領土的なスティグマを付与されてきたフランスの郊外は、旧植民地出身移民の移入以降、人種的なスティグマも伴うようになる(森 2016)。

⁵ 「移民出自の若者」ないし「移民の若者」は、移民を親にもつフランス生まれ及び(もしくは)フランス育ちの若者を指す。ここで、「移民(immigrés)」という用語は「外国で生まれフランスに移住した者」を指す行政的定義にとどまらず、旧植民地出身者とフランス生まれのその子どもを他者化・マイノリティ化する、人種・文化的な言説のカテゴリー／表象としても機能している。

この当事者と非当事者間の非対称な協力関係において、運動の出発点だったレイシズムと警察暴力の告発はかき消され、制度改革は殆ど達成されなかった(Hajjat 2013; Hadj Belgacem & Nasri 2018)。政権とメディアはこの運動を、フランス生まれの「近代的なアラブ人」＝「ブール (beur)⁶」の若者がフランス的な平等と反レイシズムの普遍的理念を掲げた非暴力の運動というフレームで神話化することで抗議的な性格を不可視化した (ibid.)。さらに、翌年の1984年には、社会党傘下で設立された白人中心の団体 *SOS* レイシズムが、「オレのダチに手を出すな (Touche pas à mon pote)」という有名なスローガンのもと、潤沢な資金で大規模な反レイシズムの道徳的キャンペーンを打ち出し、反レイシズムの言説空間における覇権を獲得することで (Hajjat 2013)、まだ新しく強固な運動基盤のない当事者の運動体を周辺化した (Tanabe 2019)。加えて、1990年代には国と全国自治体が政治色の弱い団体を選んで活動資金を助成したため (Hajjat 2006; 森 2018)、もともと反レイシズムを掲げた当事者の運動体の多くは国や自治体の手に負えない「郊外の若者」管理の下請け的性格を強め (Tanabe 2018, 2019)、制度変革を目指す動きは後退した。この時代の経験から、活動が続けた数少ない行進世代の運動家は、マジョリティや国家に「代弁」「道具化」「回収」されずに運動を継続・組織する困難を自覚すると同時に (ibid.)、当事者としての独立性の探求という運動の予示的かつ戦略的目的を明示するに至る (Amokrane 2008; Hajjat 2015; Tanabe 2018, 2019)。

同時にこの時期、旧植民地出身移民とその

子孫をめぐるポリティクスが新たな局面を見せる。1980年代末までは社会・政治的に問題化される「移民」は、良くも悪くも男子／男性だった。1989年の「スカーフ事件⁷」は、旧植民地出身移民とその子孫をめぐるポリティクスに、相対的に不可視化されていた少女／女性のカテゴリーを引っ張り出す契機となる。当初この事件は政教分離をめぐるメディア＝政治論争として始まったが、議論の焦点は徐々に性差別／フェミニズムへと移行する (Guénif-Souilamas & Macé 2004)。とりわけ2003年を境に、「ムスリム女性⁸」は性的な抑圧者である「ムスリム男性」からスカーフ着用を強要されているという見方が右派・左派を超えて支配的となったことで、2004年に通称スカーフ禁止法が制定される (森 2007)。スカーフをめぐる争点の奇妙な移行と左右の立場を超えた政治的合意は、フランスの「近代」的で「平等主義」的な価値観と、「ムスリム男性」の「反近代 (anti-modernité)」的な「女性抑圧」という、ジェンダーと人種を掛け合わせた対立図式のもとに成立している (Guénif-Souilamas & Macé 2004: 12)。この図式のもとで、「スカーフ (を被る) 女性」や「ムスリム女性」は「イスラーム」や「ムスリム男性」の支配から国家が解放すべき新たな社会問題として構築される (ibid.)。この「上からのフェミニズム」は、「ムスリム女性」にはスカーフの着用について自ら判断する能力がないと決めつけ、スカーフを脱ぎ「近代化」することを唯一の選択肢として迫る (森 2007)。結局のところ、「ムスリム女性」はスカーフを脱がない限り、そして「ムスリム男性」は「近代的」で「非暴力的」であることを証明できない限り、政治社会空間での発言を許されず、雇用にお

⁶ 「アラブ人 (arabe)」の「逆さ言葉 (verlan)」(音節を区切ってひっくり返す造語のこと)。

⁷ 「スカーフ事件」とは、パリ郊外の公立中学校で、イスラームのスカーフを着用して登校した3人の女子生徒に対して、教師がこれを政教分離 (ライシテ) の原則に反するとして阻止しようとした出来事に端を発するものである。

⁸ 人種的に「アラブ女性」や「マグレブ系女性」とカテゴリー化される女性たちは、本人の信仰やスカーフ着用の有無に関わらずイスラームと結び付けられ、しばしば「ムスリム女性」とみなされる (田邊 2016)。

ける差別を通して経済的にも排除される。

このような文脈で2000年代半ばに登場するのが、「政治的反レイシズム (antiracisme politique)」を掲げる「新たな世代の運動」(Talpin et al. 2021: 242)である。この世代は、極右や右派だけではなく左派にも共有されたスカーフをめぐる論争を背景に、新たなレイシズムの解釈と戦術を携えて出現した (ibid.)。それまで反レイシズム運動の覇権を握ってきた左派政党や伝統的な人権団体は、レイシズムを個人の偏見に関連づけ、普遍的人権を盾にとりわけ極右を槍玉に挙げてきた (森 2010)。新たな世代はこれを「道徳的反レイシズム (antiracisme moral)」(Tanabe 2019) と呼び、レイシズムを社会・国家システムに埋め込まれた歴史的 (ポスト植民地主義的) な制度として解釈する政治的反レイシズムに對置する。政治的反レイシズムの視点からすれば、レイシズムは極右や右派だけではなく、左派にも浸透しているため、当事者の声を代弁しながら道徳的反レイシズムの言説で覇権を握ってきた白人フランス人のパターナリズムにも批判が向けられる。新たな世代は、左派のパターナリズムから逃れ、運動の独立性を獲得するための新しい戦術として、「当事者 (concerné)」性 (ないし人種マイノリティ性) などの新たな表現や概念の提示や、「当事者のみ (non-mixité)」の集会や団体のメンバーシップによる参加制限を実践する (田邊 2016)⁹。支配的な思考枠組みから独立して抑圧経験についての集合的見解を抽出するため、一時的に公共圏の外

に撤退することを意味するこの実践は、すでにフェミニズム運動の道具として採用されてきたが (Larcher 2017: 103)、2010年代には反レイシズムの戦術としても急速に台頭した (田邊 2021)¹⁰。

「専門家」が客観性や専門性の名のもとに当事者の語りを奪いがちな権力構造において (中西・上野 2003, 石原 2013)、当事者性の強調と非当事者の参加制限は、マイノリティ集団が非対称な社会関係から予め逃れる極めて有効な手段となる。こうした実践を通して、新たな世代は、「当事者」と「非当事者 (non-concerné)」、「人種マイノリティ化されたもの (racisé)¹¹」と「人種マジョリティ (non-racisé)」／「白人 (blancs)」など、経験や条件としての人種や権力関係のなかで特権的に無標であり続ける集団を名指すための言語を掘り起こし、編み出してきた。しかし、個々の社会集団を区別する言語実践や、非当事者やマジョリティの参加を制限する行為は、フランスの国是である共和主義＝普遍主義への挑戦と映る (Tanabe 2019; Talpin et al. 2021)。フランス型の共和主義は、抽象的な個人と国家の直接契約に基づく社会を理想とし、個人の社会文化的属性を公共空間で特定・区別することを認めない (中野 2008)¹²。そのため個人や集団が戦略的にも特定の人種を名指し当事者性を主張することは、フランスの国民国家秩序に挑戦する側面を持つ。

このように、レイシズムの解釈と戦術において、2000年代半ば以降の運動群は一定の共

⁹ 例えば「アラブ人女性のための集会」、「93県 (郊外) のフェミニストの団体」、「クイアなアジア人の集会」など。

¹⁰ 2005年にまず署名として広く注目を集め、後にアソシエーション、そして政党となった「共和国の原住民党 (Parti des Indigènes de la République, PIR)」や、同じく2005年に設立された「黒人団体代表者評議会 (Conseil représentatif des associations noires, CRAN)」は、社会的に構築された人種集団としての社会的位置を当事者として明示した最初の集団を成す。2010年代になると、その数は大幅に増えていく。

¹¹ 英語の racialized に近く、字義通りに訳せば「人種化されたもの (racisé)」となる。社会的構築物としての側面と、マジョリティである白人が「人種化 (racialisation)」を免れ無標であるのに対して、権力構造において人種的カテゴリーを押し付けられたマイノリティとの意味合いで使われる。「人種化されていないもの (non-racisé)」はその否定系としてマジョリティの無標性を示唆する。racisé の対義語として使われる「白人 (blancs)」は、マジョリティを有標化する意味あいを持つ。

¹² これは、国家が個人を属性で区別しないという革命以来の平等原則である一方、社会的現実としての集団間の権力関係を敢えて見ないことで支配構造を温存させる効果も持つ。

通点を持つ。他方で、この運動空間に関わる主体の多様性も指摘されてきた (Hajjat 2015, Talpin et al. 2021)。

第一に、階級的かつ空間的な差異と多様性が挙げられる。2000年代に入り、旧植民地出身移民やその子孫のなかに社会上昇を果たす者の存在が指摘されてきたが (Leveau & Whitol de Wenden 2007)、政治的反レイシズムと当事者性を明示する運動は、相対的に高学歴で社会上昇を果たしたアクターを少なくとも部分的に内包していると言える (Tanabe 2018, 2019)。これに関連して、とりわけ第2世代の都市部郊外住民が、社会上昇に伴い、政治的な弾圧の目立つ郊外を脱出する現象も指摘されており (Hajjat 2008)、都市中心部を起点とする運動では高学歴で社会上昇を果たしたアクターの割合がさらに高くなると考えられる¹³。都市部の中産階級を中心とした運動では、動員可能な文化資本・社会関係資本・経済資本の量が相対的に高く、権力関係を問題化するための知的資源も備えている¹⁴。

第二に、「新たな世代の運動」には複数の年代と世代が混在している。実のところ、新たな世代のなかには1983年の行進の運動家世代も含まれている。2000年代半ば～2010年頃に40～50代になったかれらは、長い運動経歴を経て新たなレイシズムの解釈と戦術にたどり着いた (Tanabe 2018)。かれらと区別されるのが、1983年の行進を直接的に知らない10～30代の若い世代である。若い世代はSNSを積極的に使い、バーチャルな当事者空間で新しい言語を積極的に編み出す新世代でもある (Tanabe 2019)。これらの年代と世代が、特定の運動空間に混在している場合もあ

れば、特定の運動を世代と年代ごとに構成している場合もある。

最後に、不可視化されがちな側面として、ジェンダー・セクシュアリティの多様性がある。2004年以降に立ちあがったスカーフをかぶる女性たちが主導する反レイシズム・反制度的差別の当事者運動をはじめ、当事者性の観点から反レイシズムを他の問題群と交差させる形で固有の運動を立ち上げる主体がいくつも登場し (田邊 2016; Larcher 2017; Talpin et al. 2021)、反レイシズムにおける女性やクイアなアクターの可視性が飛躍的に増した。それまで異性愛でシスジェンダーの男性が主導してきた旧植民地出身移民の運動・反レイシズム運動で周辺化されていた女性やジェンダー・性的マイノリティが、固有の主体や集団として可視化されただけでなく、2015年秋の「尊厳の行進 (Marche de la dignité)」を筆頭に、女性が主導し男性が支援する大規模な反レイシズムのイベントも登場した。

当事者性という表現および概念の導入は、旧植民地出身移民とその子孫を主体とする運動のなかでも、とりわけフェミニズムを提起する運動やクイアなアクターを中心とした運動において、当事者間の権力関係と最も脆弱な当事者が対等に運動の場に参加する可能性の模索につながっている。これらの運動の場では、インターセクショナルリティ／交差性の視点・方針から当事者と非当事者 (マイノリティとマジョリティ) 間だけでなく当事者 (マイノリティ) 間の差異や立場性にも日常的実践のレベルで関心を寄せる。そして、予示的政治の次元において権力関係を再生産しない新しい社会関係のあり方を探ることが、戦略的な目的としての社会

¹³ パリ市内を起点に活動する黒人女性のコレクティブ・ムワシ (Mwasi) に固有のフェミニズム思想・運動について実証的に考察した S. ラーシェール (Syliane Larcher) は、メンバーの女性たちの平均学歴が大卒で、相対的に高いことを指摘している (他方で、それにも関わらず彼女たちが職業面では不安定であることにも注意すべきである) (Larcher 2017)。

¹⁴ ポストコロニアル研究や脱植民地主義の思想、インターセクショナルリティの概念など主に2000年代半ばから急速に普及したこれらの視点は、この世代の運動家の重要な知的資源を成す (田邊 2016; Larcher 2017)。

変革と同等に重要な目的となっている (Tanabe 2019)。しかし、旧植民地出身移民とその子孫に関わる運動の先行研究では、新たな世代の運動が旧植民地出身移民の運動をどう刷新するかという観点から、依然として戦略的政治への関心が強い。また、女性やクイアなアクターが中心の運動は、フェミニズム運動やクイア運動とみなされることで、旧植民地出身移民の運動の系譜においては周辺化される傾向が強い上に¹⁵、かれらの運動空間で取り組まれる予示的政治が取り上げられる場合においても、補足的に言及されることが多い。

そこで本稿では、多様な社会的背景を持つ女性たちをその主体に政治的反レイシズムを掲げて活動する運動の事例に着目し、それを旧植民地出身移民とその子孫による運動の系譜における「新たな世代の運動」として考察する。その上で、彼女たちの運動空間における予示的政治の側面を焦点化し、サバルタン(と)の政治的連帯を生み出し、対抗的公共圏の形成を可能にする戦術・条件を明らかにすることを目指す。

2. 研究方法と調査のフィールド

2-1. 研究対象と研究視角

本稿で事例とするのは、パリ北東部郊外に位置する自治体で2002年前後から15年以上活動する、旧植民地出身移民女性らの運動空間である。彼女たちの運動は、その公的・非公的な言説において、レイシズムの制度的・構造的側面や当事者性を重視する2000年代半

ば以降の新たな世代の運動群に位置付けられる。彼女たちは様々な集合行為を通して、郊外の「大衆地区 (quartiers populaires)¹⁶」の住民であること、「女性」であること、「移民(やその子孫)」であること、「スカーフをかぶること」に言及し、その「当事者 (concernée)」として発言してきた。例えば、2013年に彼女たちが出版した S. ブアママ (Saïd Bouamama) との共著、『複数の差別に抵抗する大衆地区の女たち (Femmes des quartiers populaires: en résistance contre discriminations)』のタイトルにも、その当事者性は示されている。

他方で、この運動空間の参加者は、行進世代の運動家やフェミニズムと反レイシズムの交差を实践する運動家など、新たな世代に特徴的なアクターだけではなく、他の運動空間では出会うことのない高齢で非識字の旧植民地出身女性を含み、後者の声を中心化している点で例外的である。彼女たちは、1960～1970年代に主に北アフリカからフランスの郊外に移住し、「移民労働者」の時代をその「妻」や「娘」として生きた。1960～1970年代の外国人／移民労働者による労働運動や1980～1990年代の反レイシズム運動で注目された、彼女たちの「夫」や「子ども」世代と違い、社会的にも学術的 (社会運動史・論、移民研究、都市社会学) にも殆ど主体とみなされることのなかった集団である。SNS を駆使する若い世代が勢いを増す2000年代半ば以降の「新たな世代の運動」の主体イメージからは一層かけ離れている¹⁷。実際に、社会上昇した若い世代と比較し

¹⁵ 1983年の反レイシズム運動群には女性を中心とした／女性のための運動体も存在したが、長く不可視化されてきた (Nasri 2011)。

¹⁶ 「大衆地区 (quartiers populaires)」は、庶民階級ないし労働者階級 (classe populaire) のうち、もっとも質素な暮らしをする人々で構成された、階級的に均質な社会空間を指す (村上 2019)。大衆地区に暮らす人々が、愛着やアイデンティティの拠り所などの意味を populaires という言葉に込め使う場合もある一方で (ibid.)、メディアや政治家は、「郊外」に伴う階級的・領土的・人種的なスティグマを不可視化する婉曲表現として「大衆地区」を用いる。歴史的に「郊外」に付与されたイメージが、労働者階級と旧植民地出身移民を想起させるため、その婉曲表現としての「大衆地区」も階級的なだけでなく人種的な含意を持つ。

¹⁷ 筆者は、「政治的反レイシズム」を掲げる「行進世代」の男性中心の運動家のネットワークを介して、本稿で事例とする女性たちの運動空間にたどり着いた (Tanabe 2019)。前者の運動は戦略的政治の傾向が強く、その運動レパートリー (運動集会の開催、政党政治への参加、フェスティバルの開催など) や最新のテクノロジー (SNS などのネット上の広報ツール) の

て、文化・社会・経済資本に欠け、様々な社会的障壁を抱えた高齢で非識字の旧植民地出身移民女性が、単独で運動を展開するのは困難である。彼女たちが参加可能な対抗的公共圏を構築するためには、他の「参加者」との政治的連帯が不可欠になる。ならば、彼女たちが中心的な存在として参加することを可能にしている運動空間での参加者同士の相互作用やそこで構築される秩序を考察することで、サバルタンの対抗公共圏の成立条件と戦術の一端を明らかにできるのではないだろうか。

分析で特に注目するのは、運動空間で密かに構築され得るオルタナティブな社会関係とそれを秩序化する言語や概念である。J. タルパン (Julien Talpin) らが指摘したように、新たな世代の運動のなかには、支配的な社会秩序に対抗する表現を明確に提示するものと、より曖昧で隠された表現を選ぶものが混在する (Talpin et al. 2021)。例えば、当事者性を主張し、フランスの国是である共和主義や普遍主義を公的に批判することは、非難や攻撃を呼び込むリスクだけでなく、国や自治体からの助成の取り下げやマジョリティからの社会的・文化的・人的資本の提供拒否という代償を誘発する。本稿で事例とした運動空間を含め、とりわけ郊外の大衆地区に位置し資本の限られた運動空間では、対抗的な言説を公的に明示しないことが一つの戦術となる。

このような観点から、J. C. スコット (James C. Scott) は、マレーシアの農民の日常的実践の考察を中心に、支配＝被支配関係のあり方において、「公的言説 (public transcript)」による抵抗の選択肢が少ない状況下では、被支配者の側が公には不可視の「隠された言説 (hidden transcript)」を用いて支配や搾取の構造に抵

抗していると指摘した (Scott [1985] 1987, 1990)。スコットは、仕事をさぼること、とぼけること、従うふり、支配者の権威を落とすような悪評の流布、匿名での破壊行為や放火など、大きな代償を誘発しない程度の日常的な抵抗に注目し、そうした行為に農民たちの権力関係への抵抗意識の表れとしての「隠された言説」が書き込まれており、それこそが時に社会構造を変化し得ると提起した (ibid.)¹⁸。本稿では、旧植民地出身移民女性らの運動空間に〈隠された言説〉に着目し、〈公的言説〉に現れない抵抗の言語や戦術を考察し、その社会的な意味を明らかにする。

しかし、〈隠された言説〉は、それが適切な効果を発揮している場合にはしばしば不可視であり、調査にも工夫が必要となる。本稿では、「境界侵犯的エスノグラフィー (transgressive ethnography)」 (George 2005: 9=2011: 13) を結果的に用いることになった。S. M. ジョージ (Sheva M. George) は、インドからアメリカへ移住した女性看護師とその家族のトランスナショナルな生活世界を、調査者としての自らの身体や振る舞いが調査地に引き起こす効果を通じて調査空間の秩序や規範を明らかにし、これを境界侵犯的エスノグラフィーと呼ぶ (ibid.)。筆者の研究・調査においても、運動空間で〈隠された言説〉に守られた秩序を知らずに攪乱することによって、結果的にその存在を明らかにすることにつながったという意味で、境界侵犯的エスノグラフィーが効果を発揮した。予示的政治を重視する運動空間においては、戦略的政治を重視する運動空間以上に、参与観察者を傍観者にしておかない。旧植民地出身移民女性らの運動空間においては、サバルタンの対抗的公共圏を構築し守るために、空

活用から社会的に可視化されやすかった。他方で、女性たちの運動はより予示的政治の傾向が強く、ローカルな活動と運動空間内のポリティクスに重心を置いていたため、前者と比較して可視化されづかった。

¹⁸ スコットの「公的言説」と「隠された言説」を用いた分析は、1990年代から2000年代前半にかけてのフランスにおけるサンパピエ (非正規滞在者) の運動を、これらの概念を用いて分析した稲葉奈々子 (2008) から着想を得た。

間に足を踏み入れるすべての者を政治的連帯の相互作用に招き入れ、非常に暗示的なやり方で〈隠された言説〉が示唆する対抗的秩序への賛同を求める。そのさい、調査・研究という社会的行為それ自体が、その対抗的秩序に逆らう側面を不可避免的に含んでいたことから、調査者としては当然と考えた筆者の行為がその秩序を浮かび上がらせることになった。このような経緯から、本稿では筆者自身の調査における経験、認識、感情それ自体がデータとして重要な位置を占めている。

2-2. フィールドとデータの概要

本稿で研究対象とした旧植民地出身移民女性らの運動空間は、パリ郊外・北東部のブラン＝メニル (Blanc-Mesnil) 市内のなかでも、とりわけ労働者階級が多く居住するティヨル (Tilleuls) 地区の地域社会センター¹⁹・ティヨルの家 (Maison des Tilleuls) を起点にしている²⁰。ブラン＝メニル市はパリ市内から鉄道で30分ほどの最寄り駅を境に南北に広がるセーヌ＝サン＝ドウニ (Seine-Saint-Denis) 県内の自治体である。

20世紀初めには人口が数百人に満たない田園地帯だったブラン＝メニルは、1920年代になると都市部郊外の産業化に伴い多くの労働者を迎え入れた。戦後になると、地方出身のフランス人労働者に加えて、欧州、次いで北アフリカ出身の外国人労働者が転入し、1968年ごろまでには、現在の人口とさほど変

わらない5万人程度まで人口が増加した (Hadj Belgacem 2015)。1968年時点ですでに約10%だった外国人の人口比率はその後さらに上昇し、2011年時点での市内の外国人比率は23%と国・県平均より高く、ティヨル地区では37%にもなる²¹。1968年時点で、市内の外国人人口の30%を占めていたのがアルジェリア人で、次いでスペインを筆頭とする欧州出身移民が20%を占めた (ibid.)。1982年の統計でも、外国人人口におけるアルジェリア人の比率は36%と相変わらず高く、1990年時点でも29%だった (ibid.)。また、歴史的に労働者階級がその住民の多くを占めてきたブラン＝メニル市の無資格率・失業率は国・県平均より高く、ティヨル地区はさらにその上を行く²²。

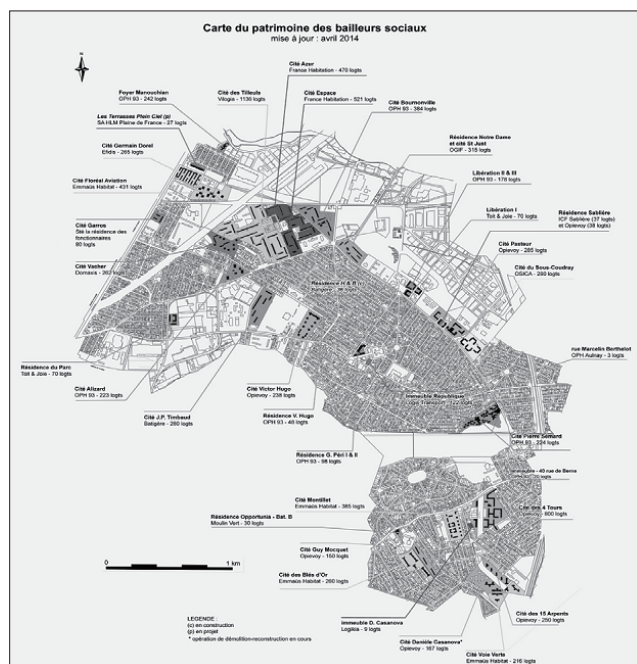
地理的には、ティヨル地区はブラン＝メニル市北西部に位置し、最寄り駅からバスでさらに15分 (もしくは徒歩で35分) 程と、交通の便が良いとは言えない (次頁【図1】、左上部の色が濃くなっている部分がティヨル地区)。市内は、高層・低層団地が立ち並ぶ労働者階級の居住地域と、一軒家が立ち並ぶ (下位) 中産階級の居住地域に分かれ、ティヨル地区は前者にあたる。ティヨル地区の中心部に位置し、四方を団地に囲まれた商店街は、1990年代までに近隣に進出した大型スーパーの影響で次第に衰退し (Tanabe 2019)、2019年夏の時点で、唯一小さな食料品店・肉屋・パン屋・薬局・ピザ屋が残っていた。半分以上の店はシャッターが下りた状態で若者が入り浸る。

¹⁹ 地域社会センター (centre social) は、非営利のアソシエーションの地位にあるが、公的活動の担い手としての側面が強く、自治体や国の助成を受けて全国的に設置されている。

²⁰ 社会調査においては、調査地や調査協力者を匿名化することがその倫理規範とされてきた。しかし本稿では、後述する理由から地名をそのままに用いた。すでにグループから退いたメンバーや、病気や高齢化のために直接話をするのが不可能だったメンバーについては匿名化することとした。

²¹ 2011年の国勢調査による (Le Blanc-Mesnil, contrat de ville 2015-2020)。ただし、出生地主義を採用するフランスでは、外国籍の親を持つ住民の多くは仏国籍者だが、人種を基準にした統計策定が仏憲法に反するため、仏国籍を持つ人種マイノリティを含む人数を把握することは難しい。

²² 2011年の国勢調査によれば、市内の低所得者向け住宅の47%がティヨル地区を含む市内北部の団地地域に集中している。また、同地域の15歳以上の住民における無資格率 (中学卒業資格を保持しない人の割合) は39%と、国平均・県平均と比較しても突出している。さらに、ティヨル地区の全世代平均の失業率は22%と国平均・県平均より高いが、若年層に限っての失業率は41.8%と突出している (Le Blanc-Mesnil, contrat de ville 2015-2020)。



【図1】「ブラン＝メニル市内の団地地域・分布図」
(出典：Hadj Belgacem 2015: 76)

調査対象とした女性たちの運動空間は、ティヨル地区中心部の同商店街と隣接するティヨルの家で2002年に開かれた料理教室から出発した。しかし後述するように、彼女たちの目的は料理をするより他の女性たちと会話し、「発言する (prendre la parole)」ことにあった (Tanabe 2019; 田邊 2021)。そのため彼女たちの活動は料理教室にとどまらず、レシピ集の制作 (2002年)、集まって会話をする「お茶会 (salon de thé)」 (2002年～)、作家を招いて一緒に詩作をする企画 (2003年)、写真展『私たちのうちの数人 (Quelques unes d'entre nous)』の制作 (2004年)、ルモンド・ディプロマティック紙に掲載された公開状 (2006年)、ローカル新聞『ここからの視点 (Vu d'ici)』の発行 (2006-2011年)、共著書『差別に抵抗する大衆地区の女たち』の出版 (2013年)、複数の演劇作品の制作・演出・出演 (2008年、2013年、2019年～) へと広がっていった。

様々なプロジェクトの立ち上げの機会でメンバーが少しずつ入れ替わるなか、自治体レベルでの政権交代を契機に徐々に活動縮小に追い

込まれる2016年まで、常に10～30名ほどのメンバーが集っていた (Hadj Belgacem 2015, Tanabe 2019)。国籍と人種・エスニシティの側面から見た場合、2013年時点での参加者の半数はアルジェリア・カビル地方出身女性やその子孫が占め、その他のマグレブ地方出身者、セネガル出身者、トルコ出身者、そしてポルトガルを含む欧州出身の白人が複数名含まれる。世代という観点から見れば、2つの異なる集団を見出すことができ、それらは後述する地理的・階級的な特徴とも呼応している。

料理教室に集うなかでグループを構成する核となった60～70代の女性たちは、アルジェリア・カビル地方出身者が多く、専業主婦として子どもの教育を通して知り合い、ティヨルの家に集う以前からローカルなネットワークを形成していた。他方で、40～50代の女性たち (と数名の男性) は、その多くが社会運動の経験と専門的職業 (地域のソーシャル・ワーカー、写真家、ジャーナリスト、劇作家、社会学者) を持つかたわら、ティヨルの家に集った前者の女性たちに加わる形で運動空間に参入した。前者の世代においては、ティヨル地区に住む者が多いが、後者の世代にはティヨル地区外とブラン＝メニル市外 (特にパリ市内) からの参加者が半数ほど含まれる。また、前者の女性たちに就学歴がなく／短く非識字の者が多いのに対して、後者の女性たちは中卒資格～大卒資格を持ち就業経験があることから、階級的に上位に位置する。このように国籍・人種／エスニシティ・階級・世代・就学歴・職歴・識字における多様性のなかで、女性たちは2002年から2016年までほぼ途切れることなく文化・芸術的プロジェクトを生み出してきた。

筆者は、主に2012年11月から2016年6月にかけて女性グループへの参与観察・資料収集・インフォーマルなインタビューを行い、2014年6月から2019年4月にかけて9名の

参加者を対象としたフォーマルなインタビューと補足的な資料収集・参与観察を行った²³。また、2002年から調査時点までに女性たちが取り組んだ文化・芸術的プロジェクトの私的・公的アーカイブも複数収集した。同時に、2012年から2016年にかけては、ティヨルの家のプロジェクトとしてティヨル地区の商店街に生まれつつあった、社会的カフェ・ティリアの設立に初期メンバーとして加わり、週に1～2回のボランティアを行った。住民たちの地域的なつながりを促進し、子どもを見守る目的で作られたこの空間には、運動空間の女性たちも多く関わっていたため、彼女たちの地域での生活や参加者同士の日常の関係性、女性たちの運動空間の地域における位置付けを知るために多いに役立った。聞き取り調査では、運動空間の変遷を時系列的に理解するための半構造化インタビューと個人の経験に焦点をあてるライフ・ストーリー調査法を組み合わせた。調査の開始からフォーマルな聞き取り調査を開始できるまでに1年半を要したことは、女性たちの運動空間における〈隠された言説〉とそれが守る対抗的秩序を反映していたが、境界侵犯的エスノグラフィーによって筆者がその秩序を脅かしたことが、〈隠された言説〉の分析につながった。

3. 政治的連帯の質的分析

3-1. 〈公的言説〉と〈隠された言説〉

〔ティヨルの家は〕私たちのグループの歩みには欠かせなかったと思う。中立的で、自由に言葉を言える場所だから。このことについては誰も反対しないと思う。みんなの間でも話したことだから。政治や、アルジェリア（独立）戦争についても話せる。それはティヨルの家だから。つまり、ティヨルの家には、そういう言葉の自由がある。²⁴

アルジェリアのカビル地方に生まれ、移民労働者となる父と専業主婦の母そして兄弟とともに1956年に6歳でフランスへ移住したヤミナ（Yamina）は、ティヨルの家をこのように表現する。フランスで育ち、10代半ばまで義務教育を受けたヤミナは、植民地支配のもとで殆ど教育を受けられず10代後半～20代にフランスへと移住した同年代の女性たちと比較すれば、読み書きができ、地域の郵便局での一般事務職員としての就労経験もある点において特異だった²⁵。そのため彼女は、同年代の「女友だち（copines）」のリーダー的存在であり、いつも彼女たちを手助けしていた。その彼女も、自宅や職場、友人の前で発言できないことが多々あった²⁶。上記の語りはまさに、ティヨルの家という場が、社会で周辺化された女性たちが様々な障壁を取り払い、自由に発言することを可能にするサバルタンの対抗的公共圏となり得たことを象徴している。

旧植民地出身女性らの対抗的公共圏と政治的連帯は、いくつかの相互に連動する条件と戦術において成り立っている。その一つは、「マイノリティ」の「女性」を中心化する機能にある。彼女たちが「女性」としての当事者性を明示する「新たな世代の運動」に位置づけられることは先述の通りだが、運動空間には厳密な意味でのメンバーシップや参加をめぐる制限はない。だからこそ女性中心の空間でありながら、複数

²³ 資料収集については2019年まで継続的に行った。また、2016年以降は機会が減ったとはいえ、2019年夏まで参与観察も断続的に継続した。

²⁴ 参加者のひとりであるヤミナの語り。女性たちが制作した演劇作品『そして、我々はフランスのズボンを履いた…（Et puis, nous passions le pantalon français）』のDVDより引用。

²⁵ 2014年4月、ヤミナとのインタビュー。

²⁶ Ibid.

の男性が運動空間に参加してきた。しかし、この空間には女性、特に地域に住む女性が集まり中心化しやすい条件が揃っている。

第一に、ティヨルの家という地域社会センターが運動空間の起点となったことは偶然ではない。ティヨルの家は、保育園や小学生以上の子どものための柔道教室、公的サービスの事務所など、公的な機能を備えた施設として、とりわけ地域に居住する子どもや家族のケアを担う専業主婦の女性たちが集まる場所である。また、センターの開館当初から識字教室やIT教室などの生涯教育も担っており、とくに旧植民地出身移民の就学経験のない女性や高齢者が集まるという点で、地域に暮らす女性にとっては子育てや家事の合間に自分のために通うことのできる数少ない場所でもあった。こうしたセンターの特徴は、地域に暮らす旧植民地出身移民女性を中心とする運動空間の出現を後押しし、それを無理なく維持できる基盤となっていた。さらに、地域から一歩外に出ればサポートを必要とする高齢で非識字の女性たちにとっては、居住地域の範囲内に定点的な運動空間があることは必要不可欠だった²⁷。

しかし、女性を中心とする運動空間が成立し維持されたもう一つの要因は、より両義的なものである。彼女たちの運動空間は、ゆるやかなメンバーシップから成り立つ二つの団体を擁し、それぞれ異なる世代から成り立っている。どちらの団体名も「女性」で構成されていることを明示する名称をとっている。それぞれ、コレクティブ・私たちのうちの数人(Quelques Unes d'Entre Nous)」「(フランス語においては「数名」が女性形であるため女性が主体であることが示される表現になっている)と、アソシエーション・あちこちから来た私たち女性(Nous Femmes d'Ici et d'Ailleurs)である。実のとこ

ろ、女性が運動空間で多数を占めることや女性であることを明示する団体名称は、郊外の旧植民地出身移民女性たちの運動という特徴において、国家や自治体から肯定的に評価されていた(Tanabe 2019)。それは、先述したスカーフをめぐる論争とジェンダー・人種のポリティクスに密接に結びついている。すなわち、旧植民地出身移民女性らが「女性」として集合することは、「アラブ人男性」の女性抑圧から解放するという国民的なプロジェクトと合致し、肯定的に解釈される。だからこそ彼女たちの運動は、継続的に自治体や公的セクターの助成を受け、市政の成功例として広報誌の表紙も飾った(ibid.)。つまるところ、旧植民地出身移民が集住する「大衆地区」の「女性」の運動という表象は、彼女たちの運動の機会構造を開き、運動資源を獲得するのに有利に働いた。

そのため、女性たちの運動空間は、「大衆地区／郊外」の「女性」を中心化する側面については〈公的言説〉として内外に明示している。他方で、この運動空間を成り立たせているその他の要素については、より密やかに共有されている。運動空間の中心にいる旧植民地出身移民女性たちは、制度上は最低限ないしマジョリティと同等のシティズンシップを有しているが、実質的には権力や資本において圧倒的に不利な立場にある。彼女たちが参加可能なサバルタンの対抗的公共圏を形成するには、権力や資本を持ち合わせた「その他」の参加者との相互作用が欠かせない。そのために彼女たちの運動空間は開かれた「自由な社会空間(free social space)」(Fantasia & Hirsch 1995: 146)の形をとる。彼女たちのプロジェクトは常に新たな参加者に開かれ、女性と地元住民が集まりやすい構造になっていることの消極的効果を除けば参加者を制限するものはな

²⁷ これは、徐が分析した在日朝鮮人女性らの夜間中学をめぐる運動にも共通する点である。日本における夜間中学も、その社会的位置づけと、女性たちが男性の目を気にせずに参加し表現できる場所だったために対抗的公共圏となり得たことが指摘されている(徐 2012)。

い。しかし空間が開かれていることは、様々なマジョリティや支配構造によって「代弁」「道具化」「回収」されるリスクと常に隣り合わせであることを意味する。そこで彼女たちは、権力と資本を獲得しつつそのリスクから逃れるための〈隠された言説〉を参加者の間で共有し、見えない戦術で支配構造に抵抗している。

〈隠された言説〉は、実質的には支配的な社会秩序への不服従を呼びかけるラディカルな側面を備えているため、それを明文化し〈公的言説〉として示すことはリスクを伴う。女性たちは政治的連帯を構築し続けるために、新たな参加者にも暗示的な形で〈隠された言説〉を共有し、賛同を求める。このような密やかな対抗的秩序により、自由な社会空間は支配的秩序から独立した状態を保てるのである。以下では、女性たちが政治的連帯を構築・維持し、ひいては支配的な社会秩序を変容させ得る〈隠された言説〉として、3-2で〈同等で物理的な参加〉、3-3で〈支配的な知の秩序への不服従〉、3-4で〈権力の共有と資本の再分配〉という相互に連動する3つの要素を考察する。

3-2. 同等で物理的な参加

旧植民地出身移民女性らの運動空間で共有される〈隠された言説〉は、初めてその場を訪れるものに知覚されることは殆どない。それは敢えて言葉にされることも文書に明示されることもなく、運動空間での相互作用において暗示的に示される方針や秩序として存在する。〈隠された言説〉のひとつである〈同等で物理的な参加〉も、明確に要求されることはないが自然に促される運動空間の隠れた方針である。

2012年の秋から、筆者は毎週月曜日の午後ティヨルの家で開催されていた「お茶会」に参加するようになった。2000年代の初めから続けられてきたこの集まりには、運動空間のなかでも特に高齢の世代の旧植民地出身移民女

性が集まり、彼女たちはそこで毎週2時間程とりとめのないおしゃべりを繰り広げていた。夫の愚痴、家族の病気、自分や親戚の子どもの結婚や失業、隣人とのいざこざ、市内の殺人事件、同性婚をめぐる是非、アルジェリアでの夏季休暇、子どもころの植民地支配や戦争の話、次の選挙についてなど、話題は多岐に渡った。数回に一度、ティヨルの家のグループ担当者と、その他の参加者が入れ替わりで加わったが、会話の内容と集まりの雰囲気は殆ど変わらなかった。筆者は旧植民地出身移民の反差別運動に興味があるという調査動機を伝え、参与観察の目的で毎週この会合に参加していたが、気がつくと給仕室でお茶を入れ、高齢女性のために椅子をはこび、彼女たちが自宅から持ち寄った手作りのお菓子をいくつも頬張り、家族のことを聞かれ、勉強／研究のことを聞かれ、フランスでの友人関係や、外国人として家賃をぼったくられる生活、日本の政治、フランス語の難しさなどを彼女たちに話していた。半数の女性はフランス語が殆ど話せなかったが、しばしば他の女性が私や他の参加者のためにカビル語やアラビア語からフランス語に訳してくれた。筆者が彼女たちについて知ったのと同じくらい、彼女たちは筆者のことを知っていた。

この一見何の変哲もないおしゃべりの会合も、実のところ運動空間の〈隠された言説〉の要素を存分に示すものだった。女性たちの運動空間ではお茶会以外にも複数のプロジェクトが同時進行しており、仕事を持ち週末だけ参加する女性、そして男性もいた。2013年の初め、彼女たちは共同制作・演出した演劇『そして、私たちはフランスのズボン履いた… (Et puis, nous passions le pantalon français)』を市内の劇場とパリの国立移民史博物館で合計4回に渡り上演した。お茶会に参加する女性の半数はこの演劇に出演していなかったし、演劇に出演している女性や男性で、筆者の知

る限りお茶会に参加したことのない人も多くいた。また女性たちは、2013年の秋、1983年の行進の30周年を期に、休刊中のローカル新聞『ここからの視点』の特集号を出すプロジェクトを企画していた。筆者も「女性たちと一緒にいるのだから」と成り行きでこの新聞に記事を書くことになり、女性たちと一緒に調査・取材し、2つの記事を担当した。記事は、筆者自身の研究とつながる問題関心や政治的立場、個人的経験を反映させたものになった。社会的カフェでのボランティアも手伝って筆者は多くの時間を女性たちと共に過ごし、気が付くと運動空間に「参加」していた。この時の筆者はまだ、自らが知らず知らずのうちに運動空間の〈隠された言説〉とその秩序を内面化し始めたことに気づいていなかったが、運動空間に参入するものに〈同等で物理的な参加〉を求めることは、一つの重要な〈隠された言説〉だった。

筆者がこの〈隠された言説〉の介在に気づくのは、運動空間で中核的存在だったズイナ(Zouina)をめぐる疑問に突き当たった時だった。ズイナは1964年にパリで生まれ、ティヨル地区の団地でアルジェリア・カビル地方出身の両親のもとに育ち、高校中退後は市内でソーシャル・ワーカーとして働いていた²⁸。その仕事ぶりが評価され、2002年にティヨルの家の所長補佐、翌年には所長に就任し、市役所で反差別担当の特別ポストに就く2008年までティヨルの家で働いていた。彼女は1980年代の反レイシズム運動に参加した「(1983年の)行進世代」でもあり、ソーシャル・ワーカーとして働きつつ「運動家」でもあるという「二刀流(double casquette)」の経歴を持つ²⁹。ティヨルの家で女性たちと出会った当初の彼女は、「サービス提供者」として「所長(補佐)」の肩

書きを持ち、お茶会に集まる女性たちは「サービス利用者」だった。他方で、彼女は多くの女性たちから運動ないしグループの中核的な存在とみなされ³⁰、アーカイブ資料の分析からも、多くのプロジェクトに関して彼女の「参加者」としての形跡が見出せた。そして、2013年に女性たちが制作した演劇では、お茶会に集まる女性たちと同じ「出演者」として共に舞台に立っていた。

すなわち彼女は、ティヨルの家を利用する女性たちと異なる地位と権力位置にありながら、実質的な意味で運動空間に参加していた。彼女だけではなく、彼女のように運動空間に「参加」するその他の「サービス提供者」や「専門家」(劇作家、社会学者、写真家、ジャーナリスト)の存在は、筆者にとってこの運動空間を掴み所のないものにしていて。誰が運動の主体なのかわからなかったのだ。そこで筆者は、運動空間における彼女の位置をズイナに尋ねた。筆者の問いかけに、彼女は以下のように答えた。

確かに、誰もがこういうやり方をするわけじゃない。変わっていると思う。でも、これが私のやり方。私は、本当の意味で[女性たちと]一緒にいる。いつも一緒にいる。中にはいって、一緒にいる。それで大丈夫。私は、「あなた方はそこにいて。私は外にいるから」[というやり方]ではなくて、「私はあなたたちと一緒にいる」。そういうこと。³¹

ズイナにとって、「共に、中にいる」ことは彼女の母親世代にあたる旧植民地出身移民の女性たちを、客体の位置に追いやらないための戦術だった。ティヨルの家という公的な性格を帯びた場所では、「サービス提供者」と「サービス利

²⁸ Hadj Belgacem (2015)、および2015年6月、ズイナとのインタビュー。

²⁹ 2015年6月、ズイナとのインタビュー。

³⁰ ここでの「メンバー」とは、厳密なメンバーシップに基づくものではなく、運動空間で共に活動する仲間の意味合い。

³¹ 2017年7月、ズイナとのインタビュー。

用者」の関係性は、主体と客体の関係性を形成してしまう。もっとも、2002年にズイナが料理教室を立ち上げた時点では、集まった女性たちは、普通の「サービス利用者」だった。しかしズイナは、30名以上の女性が6ヶ月も集まり続けた料理教室に、料理以外の目的を感じ取った。グループ・ディスカッションで意見を求められた参加者は、時間をかけて「他の女性たちと集まって話がしたくて来ている。一緒に何かしたい」と声を発した。お茶会はこの時の女性たちの声から生まれた2つ目のプロジェクトだった³²。そして、お茶会での対話が、今度は作家との詩作(2003年)、写真展の制作(2004年)へと瞬く間に様々な文化・芸術的実践、さらにはデモや集会参加へと広がっていく。女性たちは自らの視点を他の女性たちと共有し、対話し、公共空間でそれを示す。こうして、高齢で非識字の女性たちが自ら望んで数々のプロジェクトを企画し得たのは、「サービス対象者」という客体的な立場を象徴的に取り去るためにズイナが導入し、他の参加者に共有された〈同等で物理的な参加〉という〈隠された言説〉による効果だった。

誰もが同等かつ物理的に参加するアプローチは、主体＝客体関係を攪乱する作用を持ち、高齢で非識字の女性たちが運動空間に主体として関与する可能性をもたらした。このような運動空間は、「サービス利用者」「サービス提供者」「劇作家」「写真家」「参与観察者」などの立場を超えて、対話の空間に共に参加し経験を共有するなかで、常に作り続けられる共同性のある場である。お茶会での会話やローカル新聞への記事の執筆によって、「参与観察者」の筆者もまた、この共同性を引き受け運動空間に実質的に参加することを求められた。そして、こうした経験は、この稀有な運動空間に引き寄せら

れた多くの人たちと共通するものだった。

このような空間では、J. バトラー (Judith Butler) が言うところの「取りあえずの連帯 (emergent coalition)」(Butler [1990]1999 = 2000: 41) ないし「開かれた連帯 (open coalition)」(ibid.: 44) が生まれている。しかし、高谷幸 (2009) がいみじくも指摘するように、多様性のなかでの共同性とそこに立ち現れる対抗的公共圏は、多様な人間が集まるだけで突如生じるわけではない。高谷は、日本で外国人労働者が集まる個人加入の労働組合、全統一の外国人分会をめぐる考察から、立場や社会・人種的背景を異にする主体が「一つの空間に居合わせることで、共同性が創発的に立ち現れ」(高谷 2009: 129) の可能性を示すと同時に、その開かれた連帯の基盤には、社会圏と親密圏という二つの機能があることを提起した。すなわち、労働組合という組織的基盤によって労働者の権利を守り生活を支える社会圏と、具体的な他者との持続的で人格的な関係性にもとづく親密圏が、連帯の基盤となっていたという(高谷 2009)。

実際、本稿で事例とした女性たちの運動空間においても、相互扶助による実利的な側面と相互の人格的なケアを伴う関係性としての親密圏の側面がみられ、それらが共同性の形成と維持に密接に結びついている。とりわけ高齢の旧植民地出身移民女性たちは、絡み合う権力関係の構造に対抗するためのインフォーマルな相互扶助と親密性の関係を育児への関わりを通してローカルに築いてきた。女性たちの運動空間における親密圏の側面は、そうした関係性が地域の社会センターに移植されることで形成された (Tanabe 2019)。

しかし、このような相互扶助と親密圏の機能を内包した共同性のある場は、常に権力関係

³² Ibid.

を再生産するリスクと隣り合わせである³³。パレスチナの占領と植民地支配が続くイスラエルで、イスラエル人とパレスチナ人の「共存 (coexistence)」や「共住 (cohabitation)」(Dor 2012) のポリティクスを研究する T. ドール (Tal Dor) は、支配・抑圧関係にある集団や個人の間での対話や出会いが、しばしば「表面的な平等の感覚を生み出し、実際の権力関係により生み出される構造的な不平等に立ち向かうことを妨げる」(Dor 2018: 234) 効果を持つと指摘する。彼女は、こうしたうわべだけの関係性を指して「覇権的な出会い (rencontre hégémonique)」(ibid.) と呼ぶ。彼女によれば、権力関係の再生産と維持を脱するためには、「覇権的な構造と思考」(ibid.) を脱構築し問題化しなければならない。それによって初めて、異なる権力位置にある集団や個人が「ラディカルな出会い (rencontres radicales)」(ibid.) を経験することができる。ベルフックスが呼びかけた政治的連帯は、ラディカルな出会いを通して初めて樹立されるものだろう。

本稿で事例とした運動空間では、ドールの提起するラディカルな出会いが「完全な出会い (rencontre à part entière)³⁴」「真の出会い (rencontre véritable)³⁵」「本物の出会い (vraie rencontre)³⁶」、という言葉で表現され、共有されている (Tanabe 2019: 379)。その鍵となるのが、次節以降で考察する〈隠された言説〉としての〈支配的な知の秩序への不服従〉と〈権力の共有と資源の再分配〉による、覇権的

な構造と思考の解体である。

3-3. 支配的な知の秩序への不服従

2003年12月、ティヨルの家でのお茶会に集まっていた21名の女性たちは、二人の女性との出会いから、後の写真展『私たちのうちの数人』を制作するプロジェクトを始動させる。セーヌ＝サン＝ドウニ県で開かれた欧州社会フォーラム (Forum Social Européen) の一環で、ティヨルの家とズイナは、ブラン＝メニル市内でパレスチナに関わる講演会を企画していた。お茶会の女性たちは、講演会の会場で手作りのビュッフェを提供し、その売上をパレスチナの市民団体に寄付する計画を立てた。ジャーナリストのマリナ (Marina)³⁷と写真家のジョス (Joss)³⁸は、共にこの講演会に登壇し、ジョスは会場のホールで写真展示を行った。展示について話したことをきっかけに、お茶会の女性たちは、毎年のようにパレスチナを訪れ現地で写真教室を開いていたジョスに、ビュッフェの売上金を託してパレスチナの人々と共に使ってもらうことにした。その時から、ジョスとマリナは、しばしばお茶会に参加するようになった。イスラエルによるパレスチナの占領と植民地支配に継続的な関心を寄せてきたジョスとマリナは、同時にフランスでの通称スカーフ禁止法の動きにも危機感を抱き、スカーフをかぶる当事者の女性たちと共に、性差別だけでなくレイシズムや階級差別にも対抗する団体 (Baeza 2006)、平等をめざすフェミニストのコレクティ

³³ 親密圏は公共圏との理念的な対立関係において、伝統的に愛と安全に結びつけて考えられてきたが、親密圏もまた権力関係を再生産する暴力的な場となり得ることが近年指摘されてきた (齋藤編 2003)。そうした意味においては、親密圏の側面をもって、安全な空間が構築され则认为することはできず、どのような条件や戦術によって権力関係を乗り越えた親密圏が形成され得るのかを考えることが重要となる。

³⁴ 2018年5月、サラとのインタビュー。

³⁵ 2018年4月、マリナとのインタビュー。

³⁶ Ibid.

³⁷ マリナは1950年代末にポルトガルの農村に生まれ、幼少時に家族とフランスに移住した。1980年代からジャーナリストとしてルモンド・ディプロマティークを中心に寄稿すると同時に、いくつかの団体で運動家として活動した。

³⁸ アルジェリア・ユダヤ人とスペイン人政治亡命者の両親のもと、1950年代にモロッコで生まれたジョスは、幼少時にフランスに移住した。1980年代にパレスチナでのルポタージュをきっかけに写真家となったジョスは、それ以来ずっとパレスチナと連帯する運動に参加してきた。

フ(Collectif Féministes pour l'Égalité)を立ち上げようとしていた。お茶会に集まる女性の多くは旧植民地出身移民女性やその子孫で、スカーフをかぶる女性も多く含まれていたことから、彼女たちの問題意識は共通していた(Tanabe 2019)。

この時の出会いから2年後の2005年に写真展示『私たちのうちの数人』は完成する³⁹。ジョスの社会的ネットワークと写真家としての活動を通じて、ティヨルの家の女性たちは、個々のポートレート写真と書簡を、アフガニスタンのイスタリフとパレスチナのアイン＝エル＝エウエに住む女性グループと交換することになった。女性たちのポートレートは自ら選んだ服装と自己呈示をジョスがカメラで捉えたものである。もちろん、「いつも通り」にスカーフを被った女性たちもいる。撮影された写真のなかから、女性たち自身がこれと思うものを選び、そのイメージに伴う書簡も、マリナが監修・補助し女性たちが自分の言葉で綴る。選ばれた写真と綴られた書簡を抱えてジョスは旅し、「むこう」の女性たちの写真と書簡を持ち帰った。こうして、女性同士の交換の軌跡がイメージとテキストで物語られる写真展示、『私たちのうちの数人』は作られた。

展示に示された女性たちの自己表象と自己定義は、まさにこの時期に加熱していたスカーフ論争において、彼女たちを「被害者」としてステイグマ化し、言論空間から排除する支配的言説への公的な対抗表現である。そして、その対抗表現を生み出すことを可能にしたのが、既存の知の秩序から独立した、女性たちの運動空間に特有の対抗的な知の秩序である。それは、〈隠された言説〉として機能し、〈支配的な知の秩序への不服従〉をよびかける。お茶会参加者のひとりだったハビバ(Habiba)が提案し

たタイトル、「私たちのうちの数人」には、この運動空間における〈隠された言説〉が凝縮されていた。

「私たちのうちの数人(Quelques Unes d'Entre Nous)」の観点において、彼女たちは一つの運動空間における共同性と当事者性に依拠し「私たち(Nous)」という集合体をなす。しかしその共同性は同時に、そこに内包された特定の経験を共有する「数人(Quelques Unes)」の固有性と当事者性を前提としている。D. ハラウェイ(Donna Haraway)が「状況づけられた知——フェミニズムにおける科学という問いと部分的なパースペクティブの特権(Situated knowledge: The Science Question in Feminism and the Privilege of Partial Perspective)」(Haraway 1988)で述べたように、運動空間の女性たちは、個人や集団の視点が「特定の場所、時間、グループ」に「状況づけられて(situé)」いると考え⁴⁰、共同性の場が同時に特定の経験を持つ個人や特定の経験を共有する下位集団の視点を尊重することを重視する。黒人フェミニスト思想を専門とするP. ヒル＝コリンズ(Patricia Hill Collins)にならえば、この運動空間では、個人や集団の生きられた経験を基盤とする「知恵(wisdom)」が、制度化された「知識(knowledge)」と同様に(もしくはそれ以上に)信頼に値する「知(knowing)」(Hill Collins [1990] 2000: 275)であるとみなされている。

さらに、「私たちのうちの数人」の「数人」は、集合体としての彼女たちの運動空間を指してもいる。共同性に依拠した集合体の声もまた状況づけられており、だからこそ彼女たちが普遍的な「女性」の名のもとに発言することはない。より広い共同性を前提とした「私たち」＝「女性」を想定しつつも、この地域、この運動空間、

³⁹ 2005年3月8日の国際女性デーの機会に、イル＝ド＝フランス地域圏議会の議場で展示された(Tanabe 2019)。

⁴⁰ 2015年6月、ズイナとのインタビュー。

そして特定の経験を共有する者の、その時の声として、「数人」＝「女性」の発言は状況づけられる。そのかわりに、普遍的な「女性」を名乗る集合体に代弁されることもまた、彼女たちは拒否している。すなわち、この運動空間では、共同性の名のもとに一部の女性たちの声を代弁しないこと、「女性」という普遍的な集合体の名のもとに固有の運動空間の声を代弁しないこと、そして複数の視点と当事者性を同時に尊重することが求められる。

個々人や集団内部の小集団の固有性に対して、集合体としての共同性を両立する試みは、個人が他者と出会い、それぞれの視点に留まらず視野を広げていくことをも意味する。そのような自己変容を伴う対話は、既存の知的秩序に規定された女性たちの自己イメージをも変化させる。2009年から2013年まで約4年をかけて制作された演劇、『そして、私たちはフランスのズボンを履いた…』はその好例である。その制作プロセスにおいて、フランスの支配的な知の秩序により「劣等」(Fanon 1952: 8=[1998] 2004: 34) 化された旧植民地出身移民の言葉や文化のイメージを学び去り、それを集合的に学び直し継承することで、既存の知の秩序への不服従を迫った。この学び去りと学び直しは、支配的な知の秩序に規定されていた参加者の自己・他者イメージを変容させ、自然化された社会関係における知のヒエラルキーを再検討する機会を与えた(田邊 2021)。

このように〈隠された言説〉は、「女性」を同一性でひとまとめにする普遍主義の言説や、それを正当化し、状況づけられた知の有効性を認めようとしない国民的な知の秩序への不服従を迫り、新たな社会関係を構想する。しかし、対抗的な知の秩序とそこで尊重される状況づけられた知は、常に主流の知の秩序による支配

の危険にさらされている。だからこそ、〈隠された言説〉は、状況づけられた知と言葉の所有権をめぐる暗黙の方針によって、運動空間が創造する新たな社会関係を守ろうとする。

2006年、前年末にブラン＝メニル市内でも起きた「暴動(émeutes)⁴¹」にさいして、女性たちはマリナのネットワークを通じてルモンド・ディプロマティック紙に公開状を寄せた。彼女たちはこの機会に運動空間からひとつのコレクティフを立ち上げ、その名称に「私たちのうちの数人」を選んだ。2005年秋の暴動をめぐる経験は、女性たちに改めて当事者として発言することの重要性だけではなく、その言葉の所有権を保護する必要性を認識させた。

2005年10月末から11月初めにかけて、ブラン＝メニル市と隣接する自治体・オルネー＝スー＝ボワ市内で三名の少年が警察の職務質問を逃れようと変電所に紛れ込み、二名が感電死した事件をきっかけに、フランス全土の郊外／大衆地区で車両や公共施設が燃やされた。ブラン＝メニル市内でもティヨル地区は影響が大きく、ティヨルの家を含む公共施設が複数放火された。地域の公共の福祉に関わる制度がその地域の若者による暴力の標的となったこと自体に、運動空間の女性たちを含む地域住民はショックを受けた。しかし同時に、暴動に対する警察と軍隊の配備が植民地支配を想起させる規模と様式だったこと、そしてメディアや政治家による暴動の表象が住民の理解と乖離し人種主義的だったことに、住民たちは衝撃を受けた。女性たちは当初、地域住民としての生きられた経験を、日本を含む世界中から毎日押しかけるメディアに進んで証言することで、より公正な報道がなされることを期待した。しかし、メディアは彼女たちを好奇のオブジェの如く映し出す一方で、彼女たちの経験を反映する

⁴¹ メディアや社会科学において支配的なのは「暴動」という用語だが、運動家や研究者の間には、警察による郊外の若者の殺傷事件をきっかけに発生する「暴動」のサイクルに、レイシズムへの怒りなどの政治的メッセージの含意を読み取り「暴動」よりも「反乱(révoltes)」を使う立場も存在する。

報道は皆無だった(Tanabe 2019)。メディアとジャーナリストの視点を証拠づけるために、彼女たちの語りは「横領され、ねじ曲げられ、逆に自らの意図とは正反対のことを言われ」(ibid.: 249-250)た。なかには、「暴動」に参加する「非行の若者」というイメージを求めて、インタビューに答えた少年たちにフードをかぶるように要求するジャーナリストまでいた(ibid.)。

こうしたメディアによる数えきれない「裏切り」(Tanabe 2019: 250)を前に、彼女たちは外部の取材者への証言を拒否することを決意する。代わりに彼女たちは、焼け焦げたティヨルの家の前にズイナの計らいで貼られたテントで、コーヒーとお菓子を持ち寄り、地域の住民たちと共に練り上げた声明を発表する記者会見を開いた。その時のことを、ズイナは以下のように語っている。

私たちは、「やり方をひっくり返そう。いつ喋るか決めるのは私たち。私たちが「決める」という考えで、記者会見を企画した。記者会見のやり方を考える時も、とても用心深く準備した。そこで、住民たちはみんな「共同の、集団としての文書を書こう。それを読む。インタビューは一切受けない。その後、〔市内を〕行進する。そこでもインタビューは一切受けない」ということで意見が一致した。⁴²

こうして、ジャーナリストや研究者を含む外部の人間への証言の拒否が、密やかに共有される〈隠された言説〉として、運動空間の女性たち

や地域住民に共有されていった。同時に、彼女たちは自分たちで独立して集合的に発言するための道具を作り出すことへと邁進していく。その直接的な帰結が、『ルモンド・ディプロマティック』紙に掲載された公開状(2006年)、ローカル新聞『ここからの視点』の発行(2006-2011年)、そして地域の若者や社会学者 S. ブアママと共同制作したドキュメンタリー『これが93県の私たちの灼熱の身体だ』(2006年)である。この時から女性たちは、暗黙の了解事項として、自分たちの言葉やイメージ(写真や映像)は自分たちの所有物であり、その所有権は自分たちのもとにあるべきだと考えるようになった。筆者自身の境界侵犯的エスノグラフィーを通して、やはりこのような言葉の所有権やそれをめぐる〈隠された言説〉は浮かび上がった。

筆者が2012年の秋に調査を開始してから、最初の公式インタビューを実施するまでに1年半以上を要したことには、当事者の言葉の保護をめぐる彼女たちの暗黙の了解が反映されていた。筆者は、女性たちの運動空間の参加者ないし協働者とみなされながら、彼女たちの言葉にアクセスできないでいた。調査開始から6ヶ月後の2013年春には、最も親しくしていたヤミナに最初のインタビューを申し込んだが、その申し込みは何度となくはぐらかされ、延期され、土壇場の「問題」によって阻まれた。そうして1年程経ったある日、筆者は、ヤミナと仲良しのファトゥマ(Fatma)の二人にインタビューの説明をさせてほしいと、いくらか強引に誘った⁴³。ショッピング・センターのカフェでコーヒーを飲みながら、聞き取り調査協力者の権利を

⁴² 2017年7月、ズイナとのインタビュー。

⁴³ ファトゥマは、1940年代末にアルジェリア・カビル地方で農業を営む家族に生まれ、アルジェリア戦争の時代を生きた。植民地支配の影響下で、14歳になってようやく就学するも、数ヶ月後には結婚のため学校を去ることを余儀なくされた。結婚直後に出稼ぎのためフランスへ渡った夫は、12年近くの間、フランスとアルジェリアを行き来した。ファトゥマが24歳だった1974年に、ファトゥマと4人の子どもは夫に合流するためフランスへ渡り、ティヨル地区に居を構えた。移住直後から、ファトゥマは子どもの教育を通して地域の同郷女性らと交流を始めた。フランス語を話せなかった彼女にとって、カビル語で情報交換し助け合うことのできる同郷女性とは重要な存在だった。この時代に、ファトゥマはヤミナと知り合う。郵便局で事務職員として働いていたヤミナは、しばしば非識字の女性たちの代わりに手紙の宛名を記入するなど支援を惜しまなかったた

守るための「研究・調査の倫理規定⁴⁴」について説明し始めた時、彼女たちはそれに強く反応した。その時初めて、ジャーナリストや研究者を含むアクターによる「言葉の盗難 (vol de parole)⁴⁵」という彼女たちの経験と、言葉を守るための運動空間の暗黙の方針について聞くことになった (Tanabe 2019)。

この日いらい彼女たちは筆者のインタビューを受け入れてくれたが、筆者は、彼女たちの声を奪うことなく、その発話をめぐるポリティクスを調査・研究するにはどうすべきか自問することになった。彼女たちの「応答」を、研究の一部として載せることも考えた⁴⁶。2019年の初夏、彼女たちの発話をめぐるポリティクスを筆者なりに分析した研究結果を報告する集まりで、筆者は彼女たちの名前をプライバシーや調査倫理の名の下に匿名化すべきか問いかけた。調査協力者の居住地や氏名を本人の意思に関わらず匿名化することは、協力者の名前を奪い、その語りの主体の地位から退けることで、公共圏とのつながりをも奪う行為になりかねない (石原 2013: 20)。私の問いかけに、彼女たちは口々に「きちんと名前を書いてほしい」と答えた。「私たちは守られたくない。それよりも著作権がほしい」⁴⁷とヤミナは言った。本稿においても、彼女たちがそれまでに発行した写真展等の葉、映像作品、書籍においてそうしてきたように、女性たちの語りの引用に際しては

姓を除く本名を記載している。また、彼女たちが運動する土地についても、そこでの実践の主体性の尊重を優先し、匿名化せず実際の固有名詞を用いた⁴⁸。私の研究報告を聞いた後、彼女たちは私の思うように彼女たちの語りを引用し、書いて良いと伝えてくれたが、私はこの時の拙稿 (Tanabe 2019) および本稿において、実質的に彼女たちの「著作権」を守ることはできず、その意味で彼女たちの要望に未だ応えられていない。

3-4. 権力の共有と資源の再分配

ティヨルの家を起点とした運動空間の中心には、しばしば非識字でフランス語に不自由な高齢の女性たちがいた。彼女たちが対抗的公共圏に参加するには多大な障壁が立ちほだかる。なぜならまず、討議を中心に成り立つ対抗的公共圏が、聞く、書く、語るなどの言語的コミュニケーション能力を前提とするからである (徐 2012: 242)。識字や外国語学習という点で言語的障壁を抱えた女性たちが、自らに固有な声を他者にきかせ、討議に参加し、共同性の声の生成に参加することは、等しい機会が与えられるだけでは実現不可能である。さらに、様々な文化・芸術的实践をツールとする女性たちの運動空間において、各種の資本を備えた専門家 (写真家、ジャーナリスト、劇作家／演出家、社会学者、ソーシャル・ワーカー) の参加は不可

め、非識字の同郷女性たちにとっては頼りになる友人だ。ファトゥマは、子どもを介して知り合った同郷の友人たちと共に、ティヨルの家での識字教室や料理教室に通うことから、運動空間に参加するようになった。そのため、ファトゥマは運動空間の立ち上がり居合わせたメンバーでもある。これに対してヤミナは、退職してから少し遅れて運動空間に加わった。

⁴⁴ 聞き取り調査のあり方について、筆者が調査協力者に提案する内容をリストアップしたもの。同意が得られる場合にインタビューを録音したいこと、それを書き起こして手間でなければ読んでもらいたいこと、そして万が一問題の箇所があれば引用範囲から除くことなど、日本の社会学調査の教科書で推奨されているような一般的な倫理的配慮だった。しかし、フランスの社会学調査の教科書では調査・研究倫理の項目が存在せず、近年少しずつ関心が高まっているとはいえ殆ど制度化されていない。そのため、調査倫理が調査研究に関わる明確な規範として調査対象者との間で話題に上がることは少ない。

⁴⁵ 2014年4月、ヤミナとファトゥマとのインフォーマルな会話。

⁴⁶ 博士論文として執筆中だった拙稿 (Tanabe 2019) においては、この点を含めることは叶わなかった。そこで、本人たちの了解を得た上で、その後の研究で、筆者の研究を題材にしつつ、共に運動空間を再度分析する共同研究を企画した (若手研究、『仏旧植民地出身移民 (の子孫) の抵抗——インターセクショナルな連合の不／可能性』、2020年度～2023年度)。しかし、その後半年を経たずに流行した新型コロナウイルスの影響で、渡仏できなかったこと、運動が2020年初頭から2022年末現在まで活動停止状態にあることから、現在までこの計画を実現できていない。

⁴⁷ 2019年7月、ズイナの自宅での筆者の研究報告の集まりでのヤミナの発言。

⁴⁸ もちろん第一義的には、彼女たち自身が土地や言葉に対して所有権をもつ主体として参照されることを望んだことに因る。

欠だが、専門家と非専門家の間の権力位置の不均衡もまた障壁となる。

旧植民地出身意味女性らを中心とした運動空間では、これらの障壁を運動空間の内部において少しでも取り除くための〈隠された言説〉として、絶え間ない〈権力の共有と資源の再分配〉が行われていた。これこそが、〈対等で物理的な参加〉が表面的な平等の感覚を生み出す覇権的な出会いに終始せず、政治的連帯のもとでの実質的な共同性を抽出するための二つ目の条件である。そのもっとも日常的な表現は、運動空間における発言権の分配である。なんらかの議題について議論をする場合に、しばしば左回り・右回りに発話を一周させる手法が取られ、誰もが自分の順番が来た段階で発話する。これは、主体・客体を作らない〈同等で物理的な参加〉を促すと同時に、発話の優位性を持つグループが運動空間の言説実践を独占することを避けるのに役立つ。確かに、運動空間の中核的な存在としてのズイナがしばしば司会役を引き受け、使われる言語は基本的にフランス語だが、フランス語が不自由な者の発話には自然と通訳が入る⁴⁹。そうして、発話の障壁が多い者と少ない者、専門家と非専門家が、対等な発言権のもとで作品のアイディアを出し合うことが幾度となく繰り返される。

作品のアイディアが固まり、実践に移す段階にもまた同様に〈権力の共有と資源の再分配〉が行われる。例えば、2006年から2011年まで発行されたローカル新聞『ここからの視点』においては、記事を執筆したことのない女性たちに向けて、マリナが執筆技術についての研修を行なった上で、完成原稿の校正を担当した。この時、マリナのジャーナリストとしての人的資本は、そのような学習機会を持たなかった

女性たちに再分配された。非識字の女性たちについては、マリナや他の女性がその「筆の役目 (rôle de plume)⁵⁰」(Tanabe 2019: 233)を担い記事の内容を聞き取り文字化し、改めて読み聞かせて内容を確認し、文章を推敲するという作業を繰り返した。そうすることで、彼女たちは「書く」権力の共有を受け、執筆者として自らの思考と表現を「書」き、公共空間に発信することができた。

アルジェリア・カビル地方からフランスに出稼ぎにでた移民の語りを、A. サイヤードの著作『二重の不在 (Double Absence)』から再構成した演劇作品『そして、我々はフランスのズボンを履いた…』においても、脚本家兼演出家、社会学者ら、ジャーナリスト、ソーシャル・ワーカーがその他の参加者と対等な発言権を持つ一個人として位置付けられた。つまり「専門家」は、作品制作のあらゆる側面においても特権的な地位ではなく、共働作業においては各々がその資源・資本を分け合うことが原則となっていた。すなわち、「専門家」は演劇に関わる人的資本を再分配するが、それが他の参加者に受け入れられるとは限らず、逆に「専門性のない」他の参加者が賛同すれば、演劇の素人である参加者の意見が脚本執筆や演出において決定的となることもあった。(Tanabe 2019, 田邊 2021)。このような実践は、前節で検討した〈支配的な知の秩序への不服従〉という〈隠された言説〉との相互作用において、「専門家」にも「非専門家」にも受け入れられて初めて可能となる。例えば、アルジェリアのカビル地方の文化や歴史という点においては、非識字の女性たちの知が重要な文化的資源となり、脚本家兼演出家を含む参加者へと再分配された。

暗黙の対抗的秩序としての〈権力の共有

⁴⁹ この役割は、幼少時にフランスに移住したために二言語を同等に操るヤミナ、ヤミナがいない場合にはファトゥマがしばしば担っていた。フランスで生まれた移民の子ども世代は、片言しか親の言語を理解できない場合が少なくない。

⁵⁰ 2018年4月、マリナとのインタビュー。

と資源の再分配〉が絶え間なく実践されることで、全ての参加者が「共働者⁵¹」として自己を認識し、運動空間の「共同性を成す (faire commun)」／運動空間を「共同化する (mettre en commun)⁵²」ことを目指す。その結果、運動空間の参加者は、様々な文化・芸術実践における「共同制作者 (co-productrice)」、「共同脚本家／共著者 (co-auteure)」、「共同演出家 (co-metteur en scène)」、「共同創作者 (co-créatrice)」として自らの地位に言及する⁵³。こうした権力の共有は認識の問題にとどまらず、物質的な効果を持つ。例えば、『ここからの視点』の完成稿には、実質的に記事を執筆したマリナの名前ではなく、その記事に言葉と思考を提出した発話者の署名が記載される。演劇作品『そして、我々はフランスのズボンを履いた…』のプレスリリースには、「専門家」である脚本家・演出家のフィリップの名前と共に、コレクティブ・私たちのうちの数名の名前が共同脚本家・演出家として並んだ。

しかし、〈権力の共有と資源の再分配〉を促す〈隠された言説〉は、運動空間に足を踏み入れる参加者すべての耳に届くわけではない。それはまた、どの参加者にとっても容易な実践ではなく、〈同等で物理的な参加〉と〈支配的な知の秩序への不服従〉と同様に拒否される可能性を常に含んでいる。〈隠された言説〉を拒否する参加者は、暗黙のうちに、もしくはより明確な形の拒絶によってサバルタンの対抗的公共圏から「排除」されていく。「言葉の盗難」や「イメージの盗難」などの言葉と結びつけて語られる、それらの出会いは、「完全な出会い」「真の出会い」「本物の出会い」に至らなかった「出会い 損ね (rendez-vous manqué)」(Tanabe

2019: 395)として運動空間の集合的記憶となり、その後も運動空間の対抗的秩序を構成している。

4. おわりに

本稿での考察からは、サバルタンの対抗的公共圏が、高齢の旧植民地出身移民女性ら参加者の相互作用において、〈公的言説〉と〈隠された言説〉から成る対抗的秩序に基づき形成されていたことが明らかになった。重要なのは、〈公的言説〉で明示的に示される〈マイノリティ女性を中心化する〉方針と、3つの〈隠された言説〉が示唆する暗示的な各方針——〈同等で物理的な参加〉、〈支配的な知の秩序への不服従〉、〈権力の共有と資源の再分配〉——が、相互依存的な関係にあり、どれか一つが欠けても対抗的公共圏を出現させる秩序が成り立たない可能性が高いことだろう。〈同等で物理的な参加〉によって主体・客体を作らないことは、〈支配的な知の秩序への不服従〉の方針と〈権力の共有と資源の再分配〉の方針との相互作用において、表面的な平等の感覚を生み出す「覇権的な出会い」のリスクを回避させる。〈支配的な知の秩序への不服従〉の方針と〈権力の共有と資源の再分配〉の方針は、〈同等で物理的な参加〉のなかで形成される親密な関係性と共同性の一方で、それぞれが自らの社会的位置を忘れずに、むしろ徹底的にそれを意識化することを要求する。そのような「ラディカルな出会い」においては、他者の声を聞き、他者と向き合い、共にあることで、他者を本質化せずに理解しようと試みることで、本質化されたカテゴリーとしての大文字の他者 (Other) を学び去り、個別具体的な顔を持つ小文字の他者 (other) として

⁵¹ 後述するように、co という接頭辞が示唆する共に働く／作るものとしての意味合いを持つ。拙稿 (2021) では「協働者」を使ったが、共同性の意味を反映するものとして「共働者」の方が適切と考え、本稿では変更した。

⁵² 複数の参加者のインタビューにおいて聞かれた言葉。

⁵³ ほとんど全ての参加者とのインタビューにおいて、これらの用語が用いられた。

学び直す作業を促す⁵⁴。その作業は同時に、自らの社会的位置・眼差し・行為を絶えず注視し再帰的に振り返ることを求め、既存の知の秩序やそれと結びついた権力関係を問い直すことにつながる。さらにそれは翻って、各自が自発的かつ必要不可欠なこととして〈権力の共有と資源の再分配〉を実践することを促す。こうして、ベルフックスが意図したような政治的連帯が樹立され得るとき、サバルタンが参入可能な対抗的公共圏が立ち現れる。

しかし、このようなサバルタンの対抗的公共圏に埋め込まれた思考と行為のあり方、それにもとづく社会関係は、既存の社会のあり方と多に異なり、すべてを〈公的言説〉として提示することのリスクは大きい。だからこそ、対抗的秩序を守る〈隠された言説〉は、非常に密やかな形で共有され、殆ど目に見えない。実際、この運動空間は誰にでも広く開かれ、来るものを拒まない。しかし、対抗的公共圏のなかに居続けるためには、〈隠された方針〉を（部分的にでも）受け入れることが不可欠となる。〈隠された言説〉に埋め込まれた対抗的秩序を受け入れられないとき、その参加者は対抗的公共圏の存続のために「排除」されていく⁵⁵。外部の資金や資源に長けた参加者の「排除」は、戦略的政治のための資源の喪失を意味する。それでも、サバルタンの対抗的公共圏を優先する予示的政治は、それまで運動の主体たりえなかったものを参入させることで、戦略的政治の基盤を強化する効果も持つのではないだろうか。

また、先行研究がすでに示唆していたように、予示的政治と戦略的政治の間の優先順位と、〈公的言説〉および〈隠された言説〉の配分は、それぞれの運動空間において異なる。本稿で

得られた知見を、旧植民地出身移民とその子孫を主体とする運動群、とりわけ政治的反レイシズムを提示する新しい世代の運動群に位置付けた場合に、今後取り組むべきいくつかの課題を提起することができる。

先述のように、フランスでは歴史的に都市中心部よりも都市部郊外の方が政治的言説を伴う運動への弾圧度合いが高く、運動に参加することによるリターンは少ない(Hajjat 2008)。都市中心部における運動空間は、その参加者が持ち寄る資源と権力の量と質において郊外の運動より長けているため、〈公的言説〉と〈隠された言説〉の配分には、都市中心部と郊外において差が出るのではないかと考えられる。すなわち、リスクを伴う表現を公的に明示する団体は都市中心部に多いと同時に、リスクを伴う表現を公的に明示しない（が運動空間で同様の思考様式が読み取れる）団体は都市部郊外に多く、運動空間における〈公的言説〉の配分は都市中心部の方が大きいのではないだろうか。都市中心部に集まる運動家は、社会上昇を果たし都市部郊外から転出した層が多く、かれらは相対的に高い資本量を備えているため、リスクをおかす選択ができるとも考えられる。都市中心部で活動する運動体の事例へと視野を広げることで、比較の観点からこの点を検証する必要がある。

さらに、フランスにおける旧植民地出身移民とその子孫に関わる運動の先行研究では、先述のように、新たな世代の運動が旧植民地出身移民の運動をどう刷新するかという観点から、依然として戦略的政治への関心が強い。しかし、本稿の事例が示唆するように、戦略的政治の展開が部分的に予示的政治に依拠してい

⁵⁴ 物理的な出会いを通して、他者と向き合い他者を脱本質化する可能性は、小ヶ谷(2021)においても描かれており、本稿執筆の参考にした。

⁵⁵ 先述の高谷の考察においてもまた、対抗的公共圏の空間における「排除」の側面が、とりわけ親密圏の位相における労働者としての規範の内面化を基準に見られたことが指摘されている(高谷 2009)。しかし、ここでの「排除」は、マジョリティによるマイノリティの排除とは性格が異なる。この点に関しては、今後もより分析を深めていきたい。

る可能性もあり、それを踏まえれば多くの運動について予示的政治の側面も分析することが重要になるのではないだろうか。これまでは、交差性への関心が高いことから予示的政治が明示的に実践される、フェミニズムやクイアの視点を備えた運動について、とりわけ予示的政治の側面が考察されてきたが、むしろ予示的政治への取り組みが見られない運動に関しても予示的政治の観点から分析する意義があるのではないだろうか。つまり、戦略的政治が優先される運動空間で、どのように予示的政治が優先されていないのかを問うことも重要だろう。

【参考文献】

- Amokrane, Salah, 2008, « Les expériences électorales des militants de l'immigration: Le cas des Motivé-e-s », Ahmed Boubeker & Abdellali Hajjat eds, *Histoire politique des immigrations (post)coloniales en France, 1920-2008*, Paris: Editions Amsterdam, 265-271.
- Baeza, Cecilia, 2006, « L'expérience inédite et dérangeante du Collectif des Féministes pour l'Égalité », *Nouvelles Questions Féministes*, 25(3) : 150-154.
- bell hooks, 1984, *Feminist Theory : From Margin to Centre*, Cambridge : South End Press.
(野崎佐和・毛塚翠訳, 2017, 『ベルフックスの「フェミーム理論」——周辺から中心へ』(第3版) あけび書房.)
- Bouamama, Saïd, 1994, *Dix ans de marche des Beurs. Chronique d'un mouvement avorté*, Paris: DDB.
- & collectif, 2013, *Femmes des quartiers populaires: en résistance contre discriminations*, Édition Le temps des cerises.
- Boubeker Ahmed, 2003, *Les mondes de l'ethnicité: La communauté d'expérience des héritiers de l'immigration maghrébine*, Paris: Balland.
- Breines, Wini, 1982, *Community and Organization in the New Left: 1962-1968*, New York: Praeger Publishers.
- Butler, Judith, [1990]1999, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, New York: Routledge Press.
(竹村和子訳, 1999, 『ジェンダートラブル——フェミニズムとアイデンティティの転覆』青土社.)
(高橋愛訳, 2000, 『ジェンダー・トラブル』序文(一九九九) 『現代思想』28(14): 66-83.)
- Combahee River Collective, 1979, "A Black Feminist Statement", Zillah Eisenstein ed, *Capitalist Patriarchy and the Case for Social Feminism*, New York: Monthly Review Press. 362-372.
- Davis, Gerald F., Doug McAdam, W. Richard Scott & Mayer N. Zald, 2005, *Social Movements and Organization Theory*, New York: Cambridge University Press.
- De Certeau, Michel, [1980]1990, *L'invention du quotidien, I : Arts de faire*, Paris: Édition Gallimard.
(山田登世子訳, 2021, 『日常実践のポイエティーク』筑摩書房.)
- Dor, Tal, 2012, "Mizrahi-Palestinian Alliances: Coexistence or Cohabitation ?" Gardey, Delphine & Kraus Cynthia eds, *Politics of Coalition thinking Collective Action with Judith Butler*, Éditions Seismo, 105-139.
- , 2018, « Rencontres radicales : un positionnement trans/formateur », Tal Dor, Nacira Guénif-Souilamas & Manal Al Tamimi, *Rencontres radicales*, Paris: Cambourakis, 231-260.
- Fanon, Frantz, 1952, *Peau noire, masques blancs*, Paris : Édition du Seuil.
(海老坂武・加藤晴久訳, [1998]2004, 『黒い皮膚・白い仮面』みすず書房.)

- Fantasia, Rick & Eric L. Hirsch, 1995, "Culture in Rebellion: The Appropriation and Transformation of the Veil in the Algerian Revolution," Johnston, Hank & Bert Klandermans eds, *Social Movements and Culture*, Minneapolis: University of Minnesota Press, 144-159.
- Fraser, Nancy, 1990, "Rethinking the Public Sphere: A Contribution to the Critique of Actually Existing Democracy," *Social Text*, 25/26: 56-80.
(山本啓・新田滋訳, 1999, 「公共圏の再考——既存の民主主義の批判のために」『ハーバマスと公共圏』未来社, 117-159.)
- Graeber David, 2004, *Fragments of an Anarchist Anthropology*, 2nd ed., Chicago: University of Chicago Press.
(高祖岩三郎訳, 2008, 『アナーキスト人類学のための断章』以文社.)
- George, Sheva. M., 2005, *When Women Comes First: Gender and Class in Transnational Migration*, California: University of California Press.
(伊藤るり監訳, 2011, 『女が先に移り住むとき——在米インド人看護師のトランスナショナルな生活世界』有信堂.)
- Guénif-Souilamas, Nacira, 2000, *Des « beurettes »*, Paris: Grasset.
- & Eric Macé, 2004, *Les féministes et le garçon arabe*, Éditions de l'aube.
- Habermas, Jürgen, [1961]1990, *Strukturwandel der Öffentlichkeit, Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.
(細谷貞雄ほか訳, 1994, 『公共性の構造転換』未来社.)
- Hadj Belgacem, Samir, 2015, *Représenter les « quartiers populaires »?: Une socio-histoire de l'engagement électoral et partisan dans les cités d'une municipalité communiste*, Thèse de doctorat, École Normale Supérieure.
- & Foued Nasri eds, 2018, *La Marche de 1983. De la mémoire à l'histoire d'une mobilisation collective*, Nanterre: Presses Universitaires de Paris Nanterre.
- Hajjat, Abdellali., 2008, « Révolte des quartiers populaires crise du militantisme et Postcolonialisme », Ahmed Boubeker & Abdellali Hajjat eds, *Histoire politique des immigrations (post)coloniales en France, 1920-2008*, Paris: Editions Amsterdam, 249-264.
- , 2013, *La marche pour l'égalité et contre le racisme*, Paris: Editions Amsterdam.
- , 2005, *Immigration postcoloniale et mémoire*. Paris : Editions L'Harmattan.
- , 2006, « Quartiers populaires et désert politique », *Manière de voir*, 89: 23-32.
- , 2015, « Les dilemmes de l'autonomie: assimilation, indigénisme et libération ». *Quartiers XXI*. <http://quartiersxxi.org/les-dilemmes-de-l-autonomie-assimilation-indigenisme-et-liberation>, le 7 octobre 2015.
- 濱西栄司, 2016, 『トゥレーヌ社会学と新しい社会運動理論』新泉社.
- Haraway, Donna, 1988, "Situated Knowledges: The Science Question in Feminism and the Privilege of Partial Perspective," *Feminist Studies*, 14(3): 575-599.

- 長谷川公一編, 2020, 『社会運動の現在』有斐閣.
- Hill Collins, Patricia, 1989, “The Social Construction of Black Feminist Thought,” *Signs*, 14(4): 745-773.
- , [1990]2000, *Black Feminist Thought: Knowledge, Consciousness, and the Politics of Empowerment*, New York: Routledge.
- Holloway, John, [2002]2019, *Change the World Without Taking Power: The Meaning of Revolution Today*, 4th ed., London: Pluto Press.
- 石原孝二, 2013, 『当事者研究の研究』医学書院.
- 稲葉奈々子, 2008, 「〈サンパピエ〉の運動と反植民地主義言説——作動しなかったポストコロニアリズム」竹沢尚一郎編『移民のヨーロッパ——国際比較の視点から』明石書店, 146-169.
- 伊藤るり, 1988, 「80年代フランスにおける移民労働者の権利要求と意識変化——定住化のなかの階級とイスラム」『国際政治』87: 42-56.
- 小杉亮子, 2018, 『東大闘争の語り——社会運動の予示と戦略』新曜社.
- Larcher, Syliane, 2017, « ‘Nos vies sont politiques!’ L’afroféminisme en France ou la riposte des petites-filles de l’Empire », *Participations*, 19(3): 97-127.
- Leveau, Rémy. & Catherine Wihtol de Wenden, 2007, *La bourgeoisie*, Paris: CNRS Édition.
- Lin, Cynthia, Pykett Alisa, Constance Flanagan & Karma Chávez, 2016, “Engendering the Prefigurative: Feminist Praxes That Bridge a Politics of Prefigurement and Survival”, *Journal of Social and Political Psychology*, 4: 302-317.
- Lorde Audre, [1986]2007, *Sister Outsider: Essays and Speeches*, Reprint edition, Berkeley: Crossing Press.
- McDonald, Kevin, 2004, “Oneself as Another: From Social Movement to Experience Movement,” *Current Sociology*, 52 (4): 575-593.
- 森千香子, 2007, 「フランスの『スカーフ禁止法』論争が提起する問い——『ムスリム女性抑圧』批判をめぐる」内藤正典編『神の法 vs. 人の法：スカーフ論争からみる西欧とイスラームの断層』日本評論社, 156-180.
- , 2010, 「反レイシズムはレイシズムを乗り越えられるのか?——フランス反レイシズムの現在と課題」『M ネット』127: 7-9.
- , 2016, 『排除と抵抗の郊外——フランス〈移民〉集住地域の形成と変容』東京大学出版会.
- , 2018, 「政治的行為としての『暴動』——パリ郊外移民集住地域の政治変容」宮島喬・木畑洋一・小川有美(編)『ヨーロッパ・デモクラシー——危機と転換』岩波書店, 197-222.
- 村上一基, 2019, 「訳者解題」『現代フランスにおける移民の子孫たち』エマニュエル・サンテリ著, 明石書店, 155-167.
- Mwasi collectif afrofeministe, 2018, *Afrofem*, Paris: Édition Syllepse.
- 中西正司・上野千鶴子, 2003, 『当事者主権』岩波書店.

- 中野裕二, 2018, 「〈共和国的統合〉とフランス——包摂と排除の政治」宮島喬・木畑洋一・小川有美 (編) 『ヨーロッパ・デモクラシー——危機と転換』岩波書店, 73-97.
- Nasri, Foued, 2011, « Zaâma d'Banlieue (1979-1984): les pérégrinations d'un collectif féminin au sein des luttes de l'immigration », Bérout, Sophie et al. eds, *Engagements, rébellions et genre: 1968-2005*, Paris: Éditions des archives contemporaines, 65-78.
- 齋藤純一編, 2003, 『親密圏のポリティクス』ナカニシヤ出版.
- Sayad, Abdelmalek, 1977, « Les trois "âges" de l'émigration algérienne en France », *Actes de la recherche en sciences sociales*, 15(1): 59-79.
- , 1999, *La Double Absence. Des illusions de l'émigré aux souffrances de l'immigré*, Paris: Editions du Seuil.
- Scott, James C., [1985]1987, *Weapons of the Weak: Everyday Forms of Peasant Resistance*, New Haven: Yale University Press.
- , 1990, *Domination and the Arts of Resistance: Hidden Transcripts*, New Haven: Yale University Press.
- 徐阿貴, 2005, 「在日朝鮮女性による『対抗的な公共圏』の形成と主体構築」『ジェンダー研究』8: 113-128.
- , 2012, 『在日朝鮮人女性による「下位の対抗的な公共圏」の形成——大阪の夜間中学を核とした運動』御茶の水書房.
- Spivak Gayatri C., 1988, "Can the Subaltern Speak?" Nelson, Cary & Laurence Grossberg eds, *Marxism and the Interpretation of Culture*, Chicago: University of Illinois Press, 271-313.
- 高谷幸, 2009, 「脱国民化された対抗的公共圏の基盤——非正規滞在移住労働者支援労働組合の試みから」『社会学評論』60(1): 124-140.
- Talpin, Julien, Hélène Balazard, Marion Carrel, Samir Hadj Belgacem, Sümbül Kaya & Anaïk Purenne, 2021, *L'épreuve de la discrimination: Enquête dans les quartiers populaires*, Paris: PUF.
- 田邊佳美, 2016, 「『ムスリム女性』とイスラーム・フェミニスト——フランスにおける普遍主義と当事者性」『女たちの21世紀』85: 24-27.
- , 2021, 「フランス・旧植民地出身移民女性の抵抗と言語——〈声〉を取り戻すための演劇制作」『ふらんぼー (Flambeau)』47: 103-21.
- Tanabe, Yoshimi, 2018, « De l'antiracisme au travail de mémoire: Le changement de conscience politique au Tactikollectif », Samir Hadj Belgacem & Foued Nasri eds, *La Marche de 1983. De la mémoire à l'histoire d'une mobilisation collective*, Nanterre: Presses Universitaires de Paris Nanterre. 69-87.
- , 2019, *Résistance épistémique des actrices et acteurs (descendant-e-s) de l'immigration postcoloniale: Mémoire, subjectivité, sagesse*. Thèse de doctorat, Paris 13.
- Touraine, Alain, 1978, *La voix et le regard*. Paris: Édition du Seuil.

Wallace Michele, 1982, "A Black Feminist's Search for Sisterhood," Hull, Akasha G.T., Patricia B. Scott & Barbara Smith eds, *All the Women are White, All the Blacks Are Men, But Some of Us Are Brave*, New York: The Feminist Press, 5-12.